Adaptation, Self-images, Friend-images and Friendship on Contemporary Adolescents

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/943

金沢大学文学部論集　行動科学・哲学篇
第22号　2002年　1－38

友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究

岡　田　　努

Adaptation, Self-images, Friend-images and Friendship on Contemporary Adolescents

Tsutomu OKADA

青年期は従来より「疾風怒濤」と表現される両極端の激しい感情や不安の渦中にあり（Hall, 1904），また両親からの心理的離乳も加わって，いっそう精神的な不安定感を深めると考えられてきた（Blos, 1962など）。こうした不安を緩和するために，青年は親密で互いの内面を開示しあうような友人関係（内面的友人関係）を持ち，これを通して，自己イメージを再構成する年代であるとされてきた（西平，1973など）。（本研究ではこうした青年観を「伝統的青年観」と表記する）。しかし，現代青年の友人関係は，むしろこうした特徴が希薄化し，互いの内面を開示することなく，傷つけ合うことがないよう，表面的に円滑な関係を取る傾向が指摘されている（岡田，1993a，1993b，1995）．岡田（1995）は，大学生に対する調査から，「群れ関係」「気遣い関係」「関係回避」などの特徴を持つ青年群を見出し，このうち関係回避的な青年では，自己像と親友像の関連が小さいことを明らかにした。

しかし，これらの研究は大学生を対象とした青年期後期のデータに基づいており，青年期前期から後期にかけての発達的な変化については明らかとなっていない。岡田（1987）は，中学生年代において同性の親友像と理想自己像の相関が高く，高校生以降には現実自己像と理想自己像の相関関係に移行すること，また，自己評価と現実自己像－理想自己像間の差異との相関関係は青年期後期になるまで見られないことなどから，同性の親友像は中学生期において青年の理想自己像のモデルとして機能するものと考えた。本研究では，岡田（1995）で示された現代的友人関係という視点から，岡田（1987）で見いだされた自己像と親友像の関係を中学，高校，大学生の間で再検討する。

Damon & Hart（1982）によれば，児童期までの個人は身体的，動作的側面で自己を記述しやすいのに対して，青年期前期に社会的側面が，青年期後期には心理的側面での自己記述が現れやすくなるとされている。このことは，発達の段階によって，個人にとって最も意識にのぼりやすい顕在化した自己の側面が異なると考えることができる。さらに，友人像が自己像のモデルとして機能しているならば，それぞれの年代において，顕在化した側面における自己像と親友像の関連がもっとも高くなると考えられる。しかし日本では大

学世代において社会的側面での社会的比較が行われやすく（高田，1993），中学，高校に比べ大学生では，友人関係が選択的，限定的になる（落合・佐藤，1996）など，日本の青年の場合，社会的側面に関連した自己・親友像は青年期後期において顕在的になり，両者の関連が見られるものと考えられる。

一方，岡田（1993a，1993b，1995）で見出された現代の青年に特有な友人関係のあり方は，むしろ内面的関係を避け表面的な楽しさを求める傾向によって代表されるものであり，人格的共鳴や同一視を伴った関わりを通して，健康的成熟が促進される（西平，1973など）といった，伝統的青年観に基づく友人関係の特質とは異なっており，こうした現代的な友人関係を取る青年においては，自己像のモデルとしての友人像の機能も小さいのではないかと考えられる。

さらに，伝統的青年観に基づく友人関係が青年の健康な成熟を促進するとすれば，現代的な友人関係を取る青年は，そうでない青年に比べ適応感が低く，心理的健康の度合いが低いことが考えられる。

大野（1984；1995）は青年の健康なアイデンティティの実感の示標として「充実感」という概念をとりあげている。これは，「充実感気分－退屈・空虚感」，「自立・自信－甘え・自信のなさ」，「連帯－孤立」，「信頼・時間的展望－不信・時間的展望の拡散」という4対の下位概念（因子）から成る。充実感はアイデンティティの統合と高い関連を持ち，また学生生活の様々な側面で積極的な関与を示す青年ほど充実感が高いなどの結果が得られており，青年期の適応感の示標として有効であると考えられる。

さらに，現実自己と理想自己の差異もまた，個人の精神的健康の指標としてしばしば用いられる。Rogers & Dymond（1954）は（現実）自己と理想との分裂（差異）が自己に対する不満足感をもたらし，カウンセリングによってこうした分裂が小さくなることによって，不満足感が減少するとしている。これは，カウンセリングの目標の一つである自己一致（あるがままの自分と，不適切に自分に課した理想像との差異が減少し，あるがままの自分を受容できる状態）を意味するものであるといえる。また，Higgins（1987）も理想自己と現実自己の差異と抑うつなどとの関連から，両者の差異が精神的健康の指標となりえるとしている。一方 Harter（1983）；遠藤（1991）などは，現実自己と理想自己の差異を適応や健康の指標として考える際の問題点として，これが不適応よりも成熟の指標となる場合があり結果が一貫しない点，内容としての理想像や，中程度の差異の意味するところが不明で，差異と適応の関係が分かりにくいこと，呈示された基準が個人にとって意味があるかないかが考慮されてないことなどを挙げている。

これに対して現実自己の肯定度そのものを健康の指標と考える見方もある。遠藤（1995）は，自己を実際以上に肯定的にとらえる傾向（ポジティブ幻想）が精神的健康と高い関連を持つことを指摘している。

本研究では以上の点から，中学・高校・大学生にかけての友人関係の現代的特徴の発達的変化と，自己像・親友像のより詳細な側面との関連，および充実感，現実－理想自己像間の差異，現実自己像の肯定度の３つの指標（以下「適応指標」と表記する）による適応感との関連について以下の３点を中心に検討を行う。

１）青年期において，内面的友人関係が青年の健康な発達を促進するならば，こうした友人関係を取る青年は，友人との間に心理的距離を取る青年にくらべ，適応感に関する指標において，高い適応を示すだろう。

２）より年代の低い段階では，行動や身体的特徴など可視的な側面において，親友像と自己像に高い類似が見られ，高い年代では社会的側面や心理的側面での類似性が見られるだろう。

３）心理的距離をもった友人関係を取る青年は，内面的関係を取る青年に比べ，発達上の自己像のモデルとしての親友像の機能が小さいものと考えられる。よって，心理的距離を取る青年は，自己像と親友像との類似性が各自己像の側面においても小さいだろう。

方　法

調査対象　関東甲信越および近畿圏の中学，高校，４年制大学生

有効回答数

中学生　258名（男子135名　女子115名　不明８名）　２年生および３年生

高校生　259名（男子45名　女子65名　不明５名）　１，２，３年生

大学生　209名（男子103名　女子101名　不明５名）　１年生から４年生

調査時期　1996年６月から1997年６月

調査項目

以下に示す尺度項目を実施した。評定はいずれも「全くあてはまらない」（１点）～「とてもあてはまる」（６点）の６件法によった。中学および大学生は授業時間内に施行。高校生については授業の都合で，一部持ち帰りによる記入であった。

（１）充実感尺度　大野（1984）が作成した尺度。「充実感気分－退屈・空虚感」，「自立・自信－甘え・自信のなさ」,「連帯－孤立」,「信頼・時間的展望－不信・時間的展望の拡散」の４つの下位尺度（各５項目）を持つ。本研究では充実感が高いほど（すなわち下位尺度名各対の左側の属性の方向で）得点が高くなるように集計を行った。よって，本研究ではそれぞれの下位尺度を「充実感気分」「自立・自信」「連帯」「信頼・時間的展望」と記す。理論上取りうる得点の範囲はいずれも５～30点である

（２）友人関係尺度　岡田（1995）で用いられた尺度項目の一部を修正したもの15項目

（３）肯定・否定的自他概念　岡田（1995）で用いられた肯定および否的な内容を持つ形容詞からそれぞれ10項目（以後，肯定項目，否定項目と記す）

（4）側面別自他概念　山本・松井・山成（1982）の作成した自己認知の側面より，中学生，高校生段階に施行困難な領域及び，「気に入っている」など他者認知について施行困難な項目を除いた20項目を用いた。すなわち社交，スポーツ能力，知性，やさしさ，容貌，趣味や特技，まじめさの各領域から項目を選択した。

肯定的自他概念および側面別自他概念に関する項目は，現実の自分，なりたいと思う自分，もっとも親しい同性の友人に対する評定を求めた。以下「現実自己像」「理想自己像」「親友像」と記す。また否定的自他概念においては，岡田（1995）同様，現実自己像，「なりたくない」と思う自分（負の理想自己像）及び親友像の評定を求めた。

結　果

1　尺度の分析

（1）友人関係尺度

中学・高校・大学別個に主因子法（SMC）による因子分析を行った。固有値の減少および因子の解釈可能性から，中学と大学は3因子，高校は4因子を抽出しPromax回転を行った。各学校段階とも「冗談を言って相手を笑わせる」など楽しく軽躁的な友人関係を指向する関わり方を示す因子，及び「お互いの領分にふみこまない」など互いに介入を避ける内容を示す因子について，多くの項目で共通する因子が見出されたため，これら2因子に負荷量の高かった項目のみを用いて，中高大学データを一括した主因子法による因子分析を行い2因子（初期解）を得た。．4以上の因子負荷量を持つ項目を各因子を代表する項目とみなし，項目内容から第Ⅰ因子を「軽躁的関係」，第Ⅱ因子を「侵入回避」と命名した。これらの項目について各学校段階ごとでのCronbachのα係数を求めたところ，中学・高校の「侵入回避」が．6台とやや低いが，その他は．748～．843の値が得られたため，これらの合成得点を用いることとした（Table 1）。

（2）肯定・否定的自他概念：肯定的項目・否定項目を別個に，現実自己，理想自己，親友像をそれぞれ別個のケースの回答とみなし，回答者人数×3のケース数による主成分分析を行い第Ⅰ主成分に絶対値．4以上の主の主成分負荷量のものを採択した。それぞれ肯定項目（8項目），否定項目（10項目）とした（Table 2）。

（3）側面別自他概念

中学・高校・大学データを一括して主因子法による因子分析を行った。固有値の減少および因子の解釈可能性から，最終的に4因子を抽出しPromax回転を行った。因子負荷量．5以上の項目について解釈を行い，Ⅰ心理的側面，Ⅱ社会的側面，Ⅲ身体的側面，Ⅳ行為的側面と命名した（Table 3）。これらはDamon&Hart（1982）が客体的自己の側面として記述したものと符合する。

これらの各側面の因子間相関は比較的高かった．すなわち各側面は独立のものではなく

Table 1　友人関係尺度の因子分析（中高大一括）

		I 軽躁的関係	II 侵入回避	共通性
α	中学	.792	.665	
	高校	.843	.636	
	大学	.789	.748	
4．冗談を言って相手を笑わせる		.851	-.122	.535
7．ウケるようなことをよくする		.844	-.194	.326
14．楽しい雰囲気になるようふるまう		.605	.003	.473
2．お互いのプライバシーには入らない		.040	.730	.739
5．お互いの領分にふみこまない		.144	.673	.750
3 お互いに傷つけないよう気をつける		.280	.498	.366
寄与率(%)		31.716	21.435	

Table 2　肯定・否定的自他概念項目の主成分分析

項目	I	II	共通性
きちんとした	.505	.636	.659
陽気な	.807	-.234	.707
ていねいな	.516	.684	.734
明るい	.857	-.236	.791
おもしろい	.844	-.193	.750
素直な	.610	.436	.563
楽しい	.867	-.147	.773
強い	.567	.207	.364
おしゃべりな	.449	-.508	.460
(静かな)	-.233	.631	.453
寄与	4.32	1.93	

項目	I	II	共通性
(うるさい)	.380	.754	.713
暗い	.751	-.379	.707
だらしない	.679	.351	.583
陰気な	.732	-.162	.562
乱暴な	.592	.506	.606
無口な	.647	-.477	.646
意地っぱりな	.608	.425	.551
つまらない	.779	-.162	.633
さびしい	.742	-.201	.591
弱い	.747	-.1281	.574
寄与	4.56	1.61	

（）内は不採択項目

相互に関連したものであるとする佐久間・遠藤・無藤（2000）を支持する結果となった。

（4）充実感尺度：本尺度は大学生向けに開発されたものであり，中学・高校生への適用については，未知である。そこで各下位尺度ごとに学校段階ごとでのα係数を求めた。その結果，中学・高校での「自立・自信」，高校・大学での「信頼・時間的展望不信・時間的展望」の拡散が．6台とやや低いものの，他は．7以上の信頼性係数が得られ，ほぼ使用可能であると考えられる（Table 4）。

Table 3　側面別自他概念の因子パターン（Promax 回転後）

	I	II	III	IV	共通性
I 社会的側面					
1.人とうまくつきあえる	.835	-.070	.065	.041	744
7.多くの人とつきあいがある	.826	-.077	-.026	134	.724
13.同年代の異性と楽しく話ができる	694	-.131	029	.215	.612
4.人に対して思いやりがある	623	.369	082	-.103	.738
10.他人にやさしい	638	.358	.073	-.098	.741
16.おおらかな人柄である	.478	.359	.088	- 045	.560
II 心理的側面					
6 きちょうめんな性格	- 065	.683	.059	-.040	.444
12.自分にきびしい	- 067	.649	.162	101	.538
18.責任感かつよい	.180	636	.006	138	.646
9.もの知り	-.059	.496	401	.106	581
III 身体的側面					
5 外見がカッコいい	111	.011	.805	031	.790
11.顔がよい	.116	.056	.782	.013	.777
3 頭がよい	- 040	.400	.678	- 072	.730
15 頭の回転がはやい	-.033	.444	.579	040	.722
IV 行為的側面					
19.得意なスポーツがある	.018	.029	.070	.792	.711
17.特技がある	.095	296	-.074	.647	.665
20.熱中している趣味がある	-.010	459	- 333	.632	.609
2 体力がある	.106	-.110	.353	553	635
14.スポーツマンタイプにみえる	- 007	-.098	.433	.598	.695
8.運動神経がある	.061	- 071	.487	.553	.786
寄与率(%)	68.96	54.59	64,76	55.23	

因子間相関

	II	III	IV
I	.460	.544	.481
II		.375	.320
III			.419

2　学校段階ごとでの各変数の平均値

各変数についての学校段階ごとでの平均値と標準偏差を Table 5 に示す。否定項目での「なりたくない」と思う自分につての評定（負の理想自己像）については，得点を逆転し，より得点が低いほど「なりたくない」方向の回答になるよう調整した。以下すべて負の理想自己像については同様に得点を逆転したものを用いた。友人関係尺度および充実感について，学校段階間で一元配置分散分析による比較を行い，有意差の見られたものについて Tukey の LSD 法による多重比較を行った。その結果，充実感尺度については，「自立・自信」得点について，F（2,708）＝10.47（p<.01）となり多重比較の結果大学が他の年代より高く，「連帯」得点では F（2,712）＝9.68（p<.01）で中学が他の年代より高かった。また「充実感気分」得点において F（2,719）＝2.92（p<.10）の傾向差が見られ高校よりも中学の方が高い得点を示していた。友人関係尺度では，「軽躁的関係」因子で F(2,714)＝2.51（p<.10）で中学よりも高校が高く，「侵入回避」では F（2,720）＝3.32（p<.05）

Table 4　充実感尺度項目とα係数

Ⅰ充実感気分	
α：	中学.744 高校.833 大学.880
毎日の生活にはりがある	
*毎日の生活に退屈している	
生活に充実感で満ちた楽しさがある	
*毎日，毎日，変化のない単調な日々でつまらない	
私は生きがいのある生活をしている	
Ⅱ自立・自信	
α：	中学.605 高校.652 大学.702
私は主体的に生きていると思う	
自分の信念にもとづいて生きている	
私は独立心が強いと思う	
自分の生き方は自分で決めることができる	
*いざとなるとどうしても人をたよってしまう	
Ⅲ連帯・孤立	
α：	中学.750 高校.747 大学.735
*だれも私を相手にしてくれないような気がする	
*私ひとりがとり残されているようで寂しい	
*自分の理想とはかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる	
*自分がなさけなく いやになる	
*私をわかってくれる人がいないと思う	
Ⅳ信頼・時間的展望不信・時間的展望の拡散	
α：	中学.714 高校.662 大学.689
私には毎日の生活の中でなにかへの使命感がある	
生まれてきてよかったと思う	
私は価値のある生活をしていると思う	
自分の責任をはたすことに喜び感じる	
毎日の生活の中で ものをやりとげる喜びがある	

*逆転項目

で中学よりも大学が高かった。

3　適応指標と友人関係の関連

（1）適応指標間での相関

現実自己像・理想自己像・親友像間での個人の差異の示標として，各像間のユークリッド距離（D スコア）を $D=\sqrt{\Sigma d^2}$ の公式により求めた。なお上述のように負の理想自己像については得点を逆転してあるため，D スコアが大きい程，「なりたくない像」との距離が大きい（なりたい姿に近い）ことを示す。

各適応指標（現実自己像，現実自己－理想自己像間の D スコア，充実感）相互の相関を Table 6 に示す。ここに見られるように，現実自己像と D スコアの間に中学，高校の肯定項目を除き絶対値で．4 以上の高い相関関係が見られた。また現実自己像と充実感尺度の間では，以下について．4 以上の比較的高い相関関係が見られた。すなわち，肯定項目と充実感尺度の「信頼・時間的展望」（中学，高校，大学），社会的側面と「信頼・時間的展望」（中学，大学），心理的側面と「信頼・時間的展望」（高校），行為的側面と「信頼・時間的展望」（大学），否定項目と充実感尺度の「連帯」（中学，高校，大学）である。

Table 5　各変数の平均と標準偏差および平均値の差の検定

	中学	高校	大学	F	多重比較 Tukey HSD
充実感尺度					
充実感気分					
平均	17 65	16 54	17 35	2 92+	高大<大中
SD	5 27	5 68	5 01		
n	256	257	209		
自立・自信					
平均	16 96	17 57	18 71	10 47**	中高<大
SD	3 90	4 33	4 13		
n	253	249	209		
連帯					
平均	20 78	19 18	18 98	9 68**	大高<中
SD	5 13	5 03	4 64		
n	257	251	207		
信頼・時間的展望					
平均	18 92	19 15	19 44	80	
SD	4 70	4 40	3 87		
n	253	252	208		
友人関係尺度					
軽躁的関係					
平均	12 51	13 13	12 65	2 51+	中大<大高
SD	3 51	3 32	2 87		
n	253	256	208		
侵入回避					
平均	11 42	11 51	12 05	3 32*	中高<高大
SD	2 82	2 80	2 79		
n	255	259	209		

肯定・否定自他概念

	中学	高校	大学
肯定項目			
現実自己			
平均	33 79	34 13	32 93
SD	7 10	6 21	6 33
n	257	251	209
理想自己			
平均	42 39	43 22	42 25
SD	8 62	8 22	7 03
n	254	255	208
親友			
平均	37 66	38 65	37 75
SD	8 30	6 43	5 73
n	253	252	208
否定項目			
現実自己			
平均	25 54	27 58	27 81
SD	6 31	7 30	7 08
n	253	251	208
理想自己			
平均	15 09	15 79	17 31
SD	9 28	9 18	9 21
n	255	254	208
親友			
平均	20 50	21 08	21 20
SD	6 62	7 51	5 65
N	253	253	208

側面別自他概念

	中学	高校	大学
社会的側面			
現実自己			
平均	23 07	23 32	22 39
SD	5 83	5 65	5 61
n	256	257	209
理想自己			
平均	30 85	31 70	31 02
SD	5 56	5 51	4 88
n	256	257	207
親友			
平均	25 95	26 63	27 05
SD	6 63	5 80	4 91
n	256	256	209
心理的側面			
現実自己			
平均	12 81	13 41	14 10
SD	3 94	3 77	3 51
n	257	256	209
理想自己			
平均	18 14	18 28	18 39
SD	4 19	3 84	3 50
n	258	258	208
親友			
平均	14 68	15 12	15 42
SD	258	259	209
n	4 48	3 93	3 32
身体的側面			
現実自己			
平均	10 04	10 85	11 65
SD	4 37	4 30	3 91
n	257	256	209
理想自己			
平均	19 82	20 39	20 03
SD	4 52	3 62	3 80
n	256	257	208
親友			
平均	15 85	16 38	15 79
SD	5 23	3 83	3 39
n	254	257	205
行為的側面			
現実自己			
平均	21 98	22 04	20 83
SD	7 06	6 76	5 74
n	256	257	209
理想自己			
平均	29 57	30 00	29 09
SD	6 32	5 67	5 13
n	254	258	208
親友			
平均	25 45	25 31	23 36
SD	6 88	5 89	5 85
n	254	254	209

**p< 01, * p< 05

（2）適応指標と友人関係尺度の相関

各適応指標と友人関係尺度の各下位尺度の間での相関係数を Table 7 に示す。ここに見られるように，現実自己像と「軽躁的関係」因子得点の間で，肯定項目において各年代とも．5以上の高い相関が得られ，また側面別自他概念の社会的側面においても，.318～.432の相関関係が見られた。一方，充実感および現実自己－理想自己像間のDスコアと友人関係尺度の間では，高い相関関係は見られなかった。

そこで，中間的な得点を持つ者を除いた傾向を見るため，友人関係尺度の各下位因子の

Table 6　適応指標間の相関係数

肯定項目		D スコア	充実感尺度 充実感気分	自立・自信	連帯	信頼・時間的展望
中学	現実自己	-.310**	.333**	.292**	.079	.457**
	D スコア		-.127*	-.120	-.288**	-.161*
高校	現実自己	-.242**	.285**	.211**	.197**	.444**
	D スコア		-.264**	-.069	-.276**	-.154*
大学	現実自己	-.456**	.333**	.221**	.315**	.446**
	D スコア		-.179**	-.161*	-.204**	-.091
否定項目						
中学	現実自己	.575**	-.328**	.068	-.512**	-.266**
	D スコア		-.238**	.057	-.360**	-.284**
高校	現実自己	.563**	-.168**	.054	-.490**	-.072
	D スコア		-.177**	.052	-.304**	-.018
大学	現実自己	.627**	-.356**	-.314**	-.591**	-.303**
	D スコア		-.211**	-.238**	-.346**	-.171*
社会的側面						
中学	現実自己	-.570**	.326**	.291**	.130*	.458**
	D スコア		-.194**	-.127*	-.272**	-.209**
高校	現実自己	-.596**	.203**	.162*	.220**	.389**
	D スコア		-.267**	-.133*	-.268**	-.263**
大学	現実自己	-.705**	.344**	.242**	.377**	.444**・
	D スコア		-.294**	-.272**	-.362**	-.253**
心理的側面						
中学	現実自己	-.450**	.121	.398**	-.088	.365**
	D スコア		-.010	-.207**	-.105	-.148*
高校	現実自己	-.503**	.158*	.383**	-.073	.417**
	D スコア		-.148*	-.272**	-.102	-.155*
大学	現実自己	-.486**	.087	.317**	.023	.242**
	D スコア		-.103	-.197**	-.077	-.041
身体的側面						
中学	現実自己	-.541**	.135*	.340**	.119	.273**
	D スコア		.011	-.218**	-.255**	-.081
高校	現実自己	-.633**	.171**	.300**	.126*	.273**
	D スコア		-.164**	-.254**	-.135*	-.107
大学	現実自己	-.664**	.161*	.297**	.171*	.281**
	D スコア		-.156*	-.228**	-.151*	-.091
行為的側面						
中学	現実自己	-.606**	.275**	.205**	.153*	.373**
	D スコア		-.115	-.112	-.318**	-.185**
高校	現実自己	-.637**	.195**	.283**	.105	.338**
	D スコア		-.207**	-.225**	-.086	-.162*
大学	現実自己	-.608**	.229**	.273**	.306**	.424**
	D スコア		-.119	-.071	-.195**	-.122

**p<.01, * p<.05

Table 7　友人関係と適応指標との相関係数

	中学 軽躁的関係	侵入回避	高校 軽躁的関係	侵入回避	大学 軽躁的関係	侵入回避
充実感尺度						
充実感気分	.110	.113	.093	.060	.179**	-.035
自立・自信	.160*	.210**	.113	-.065	.068	.074
連帯	-.133*	-.173**	-.018	-.118	.120	-.143*
信頼・時間的展望	.261**	.191**	.255**	.113	.293**	.025
現実自己						
肯定	.601**	.210**	.553**	.029	.502**	-.072
否定	-.105	.001	-.098	.053	-.224**	.094
社会	.432**	.310**	.397**	.028	.318**	-.074
心理	.269**	.329**	.046	.065	-.049	.142*
身体	.196**	.112	.147*	.010	.068	-.158*
行為	.320**	.097	.256**	-.158*	.152*	-.001
現実自己像-理想自己像Dスコア						
肯定	-.076	.066	.020	-.068	-.072	.134
否定	.022	-.024	.138*	.009	-.084	.103
社会	-.129*	-.008	-.054	-.062	-.126	.120
心理	014	-.007	.140*	-.037	.030	.052
身体	.075	.109	.160*	-.018	.085	.174*
行為	-.089	.076	.009	.061	.014	.076
理想自己像-親友像Dスコア						
肯定	-.059	.010	.048	-.149*	.020	.142*
否定	.013	-.119	.222**	-.076	.115	.050
社会	-.075	-.075	.042	-.146*	.017	-.011
心理	-.002	-.037	.087	-.111	.049	.076
身体	-.069	-.103	.186**	-.056	-.098	.021
行為	-.083	-.094	-.020	-.088	.127	.026
現実自己像-親友像Dスコア						
肯定	-.167**	.161*	-.086	.035	- 094	.261**
否定	-.043	.096	.107	.158*	-.072	.227**
社会	.016	-.004	-.036	-.096	-.107	.254**
心理	.032	.068	.108	.005	-.083	.207**
身体	.241**	.108	.075	-.032	.034	.048
行為	.061	-.003	.025	.042	.104	.151*

**p<.01,* p<.05

合成得点での第1四分位数以下の得点の者を下位群，第4四分位数以上の得点の者を上位群とし，両群間について充実感およびDスコアの平均値の差の検定を行った（Table 8，9）。なお，充実感尺度についてはt検定を行い，正規分布が仮定されないDスコアについてはMann－WhitneyのU検定を行った。

その結果，「軽躁的関係」得点の上位・下位群間では以下の通りとなった。充実感尺度については，「充実感気分」と「連帯」について，大学で上位群が下位群よりも得点が高く，「信頼・時間的展望」では，中学と大学で下位群が上位群より高く，高校では上位群が下位群より高かった。また，現実－理想自己像間でのDスコアについては，中学では行為的側面で上位群よりも下位群の方が高く，高校では否定項目，心理的側面，身体的側

Table 8　友人関係尺度得点の上位下位25%群間での充実感尺度得点の比較

軽躁的関係		中学		高校		大学	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD
充実感気分	H	18.73	5.39	15.86	6.31	18.93	5.67
	n	79		66		58	
	L	17.32	4.80	15.16	5.46	16.20	4.44
	n	71		75		75	
t(df)		1.684(148)		.710(139)		3.022(105.583)!**	
						L<H	
自立・自信	H	17.57	4.60	17.92	4.66	19.05	4.26
	n	79		65		58	
	L	16.23	3.78	16.58	4.04	18.77	4.48
	n	71		73		75	
t(df)		1.941(148)		1.818(136)		.363(131)	
連帯	H	20.40	5.77	17.98	5.55	20.72	4.64
	n	80		65		58	
	L	21.44	4.86	18.69	5.13	18.53	4.53
	n	72		72		73	
t(df)		1.210(149.385)!		.778(135)		2.719(129)**	
						L<H	
信頼・時間的展望	H	20.32	4.52	19.97	4.74	20.79	3.62
	n	78		66		58	
	L	17.27	4.73	17.71	4.52	18.20	3.89
	n	71		72		74	
t(df)		4.025(147)**		2.868(136)**		3.914(130)**	
		H<L		L<H		H<L	

侵入回避		中学		高校		大学	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD
充実感気分	H	18.75	5.08	16.72	5.60	16.76	4.88
	n	83		89		66	
	L	17.03	5.02	16.46	6.38	17.56	4.79
	n	101		87		62	
t(df)		2.295(182)*		.287(174)		-.944(126)	
		L<H					
自立・自信	H	17.64	4.17	17.36	4.85	19.00	4.56
	n	80		85		66	
	L	16.43	3.37	17.61	4.08	18.58	3.70
	n	100		84		62	
t(df)		2.148(178)*		-.351(167)			.569(126)
		L<H					
連帯	H	20.00	5.66	18.44	5.34	18.28	4.86
	n	83		89		65	
	L	21.02	4.87	20.26	4.79	19.69	3.96
	n	101		82		61	
t(df)		-1.314(182)		-2.337(169)*		1.779(124)	
				H<L			
信頼時間的展望	H	20.00	5.13	19.80	4.25	19.38	4.39
	n	82		88		66	
	L	17.83	4.48	18.69	5.00	19.08	3.51
	n	100		83		61	
t(df)		3.044(180)**		1.566(169)			.418(125)
		L<H					

**p<.01,* p<.05　!:Welch の修正
L.. 友人関係尺度下位群　H..同上位群

Table 9　友人関係尺度得点の上位下位25%群間での現実自己－理想自己間のDスコアの比較（Mann－WhitneyのU検定）

軽躁的関係

		中学		高校		大学	
		N	平均ﾗﾝｸ	N	平均ﾗﾝｸ	N	平均ﾗﾝｸ
肯定	H	78	69.91	65	73.40	58	64.46
	L	69	78.62	73	66.03	74	68.10
	U		2372.0		2119.0		2027.5
否定	H	79	74.25	62	78 74	57	62.99
	L	68	73.71	74	59.92	74	68.32
	U		2666.0		1659.0** L<H		1937.5
社会	H	79	69.38	66	68.88	58	61.41
	L	72	83.26	74	71.95	74	70.49
	U		2321.0		2335.0		1851.0
心理	H	79	77.96	65	78.19	58	70.34
	L	72	73.85	74	62.80	75	64.41
	U		2689.0		1872.5* L<H		1981.0
身体	H	80	79 10	66	79.38	58	70.83
	L	71	72.51	73	61.52	75	64.04
	U		2592.0		1790.0** L<H		1953.0
行為	H	76	66.36	67	71.91	58	68.77
	L	70	81.25	73	69.21	75	65.63
	U		2117.5* H<L		2351.0		2072.5

侵入回避

		中学		高校		大学	
		N	平均ﾗﾝｸ	N	平均ﾗﾝｸ	N	平均ﾗﾝｸ
肯定	H	82	96.71	89	82.40	65	67.48
	L	100	87.23	81	88.91	62	60.35
	U		3673.0		3328.5		1788.5
否定	H	79	86.11	87	90.03	66	62.02
	L	99	92.20	85	82.88	60	65.13
	U		3643.0		3390.0		1882.0
社会	H	81	90.98	88	84.13	65	65.06
	L	102	92.81	86	90.95	61	61.84
	U		4048.0		3487.5		1881.0
心理	H	82	90.71	89	89.46	65	64.10
	L	102	93.94	85	85.45	62	63.90
	U		4035.0		3608.5		2008.5
身体	H	81	97.43	89	86.96	65	71.25
	L	102	87.69	84	87.05	62	56.40
	U		3691.5		3734.0		1544.0* L<H
行為	H	82	97.43	89	89.78	65	62.49
	L	100	86.64	85	85.11	62	65.58
	U		3613.5		3579.5		1917.0

**p<.01,* p<.05
L.. 友人関係尺度下位群　H..同上位群

面で下位群よりも上位群が高かった（ただし否定項目については，先に述べたようにDスコアが大きいほど「なりたい姿」に近いことを意味するため，心理的及び身体的側面とは意味が異なる）。

「侵入回避」得点の上位・下位群間では以下の通りとなった。充実感尺度については，「充実感気分」「自立・自信」「信頼・時間的展望」で中学の下位群が上位群よりも有意に

高く，また「連帯」で，高校で上位群よりも下位群が高かった。またDスコアについては，大学の身体的側面において，下位群よりも上位群が有意に高かった。

4　現実自己・理想自己・親友像間の関係

現実自己，理想自己，親友像3者間の学校段階別の相関係数をTable10に示す。現実自己－親友像間の相関については岡田（1999）と同様に，無相関検定で有意となったものについて，理想自己像を統制した偏相関係数を求めた。その結果，肯定項目では各年代とも現実－理想自己像間で.350～.538の相関が見られ，また中学と大学では理想自己－親友像間に.5以上の相関，高校では現実自己－親友像間に.301の偏相関が見られた。否定項目では，中学，高校の現実自己－親友像間で.362～.427の偏相関係数が得られた。社会的側面では，理想自己像－親友像間で各年代とも.330～.416の相関が見られ，また中学と大学では現実－理想自己像間で.406～.475の相関が見られた。心理的側面および行為的側面では，中学の現実自己－理想自己像，および理想自己－親友像，大学の現実－理想自己像間でそれぞれ.3以上の相関が見られた。

次に各学校段階を通じた自他認知項目での自己像・親友像間の関連を検討するために，柴山（1994）を参考に個人差多次元尺度法による分析を行った．肯定項目，否定項目および側面別に，項目×学校段階間の相関行列を求め，これを$\sigma=\sqrt{1-r^2}$によって非類似性の行列に変換し入力データとした．各群共通の空間に項目を布置したものと，学校段階ごとの重みづけ係数のプロットをFigure 1 ～ 6 に示す。

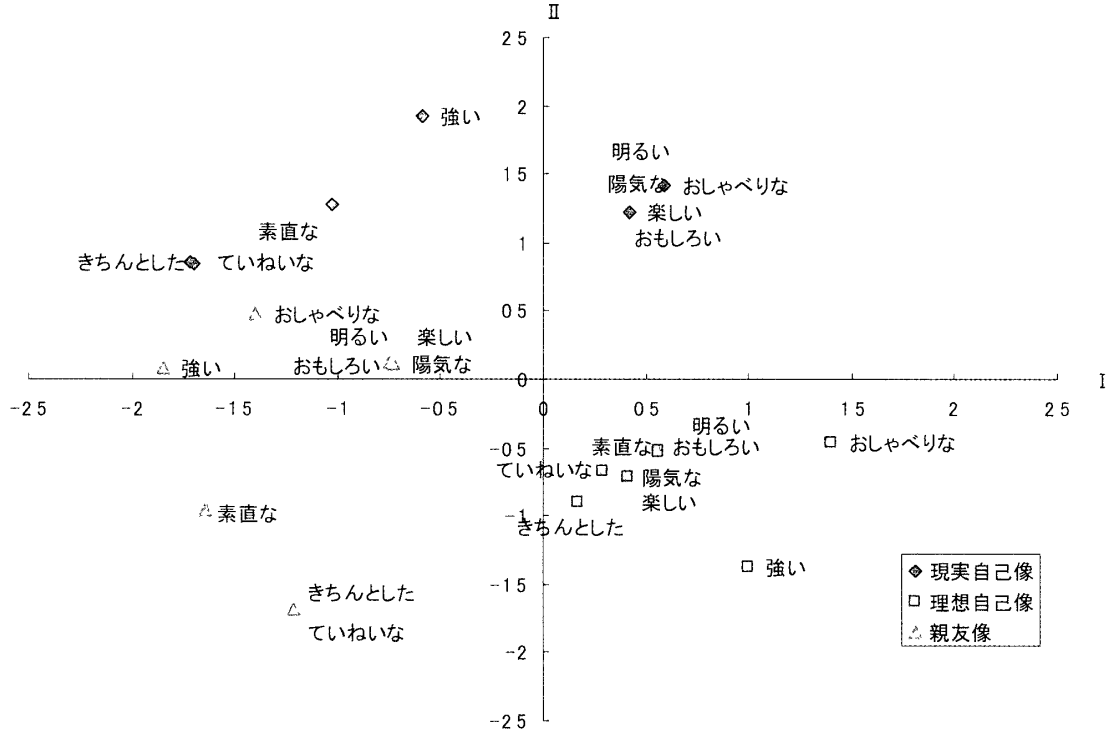
Table10　現実自己－理想自己－親友像間の相関および偏相関

	中学			高校			大学		
	理想	親友	偏相関（現-友）	理想	親友	偏相関（現-友）	理想	親友	偏相関（現-友）
肯定									
現実	.538**	.349**	.095	.350**	.375**	.301**	.468**	.316**	.098
理想		.521**			.304**			.516**	
否定									
現実	.060	.430**	.427**	.257**	.407**	.362**	.094	.207**	.197**
理想		.071			.277**			.142*	
社会的側面									
現実	.475**	.326**	.173**	.308**	.272**	.190**	.406**	.276**	.129
理想		.391**			.330**			.416**	
心理的側面									
現実	.380**	.268**	.163**	.247**	.043	---	.300**	.054	---
理想		.332**			.280**			.226**	
身体的側面									
現実	.289**	.098	---	.069	.095	---	.258**	.021	---
理想		.298**		.241**				.261**	
行為的側面									
現実	.450**	.415**	.240**	.264**	.292**	.235**	.377**	.238**	.175*
理想		.512**			.282**			.212**	

**p<.01, *p<.05

肯定項目（Figure 1）では項目の布置から第1軸は親友像，現実自己像，理想自己像の順で大きな値を取ることから，現実の像（－）対想像（＋）を区別する軸であると考えら

Figure 1　肯定項目　中・高・大学生の類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



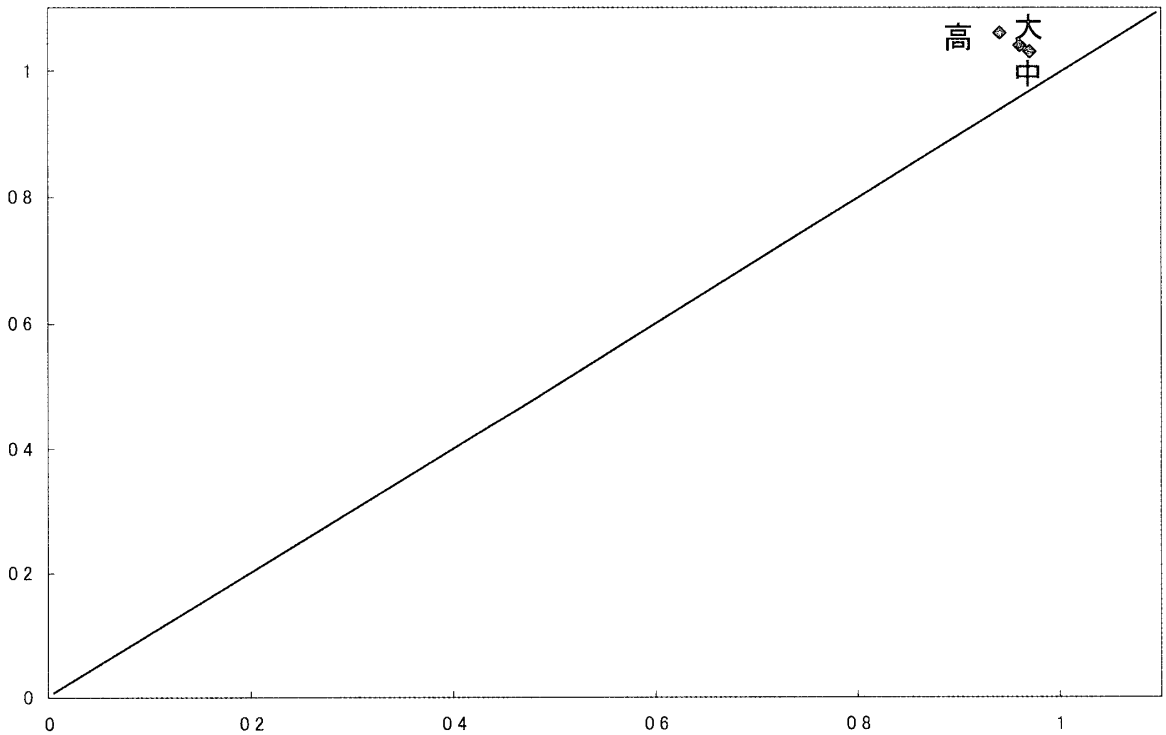
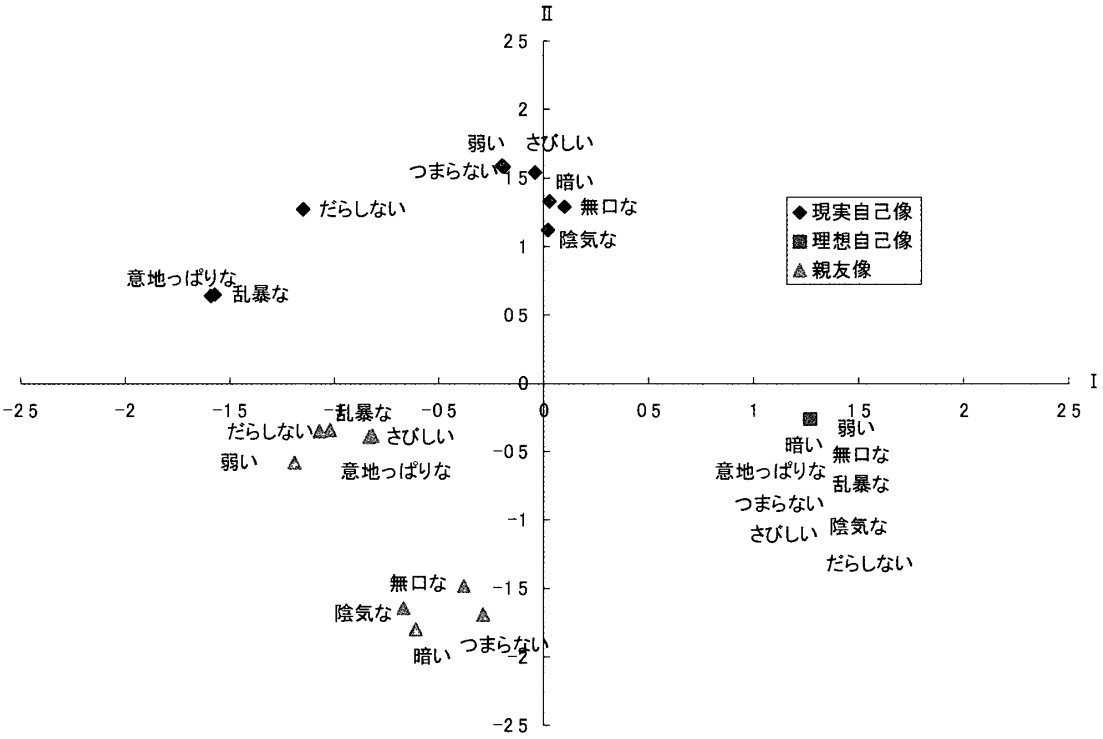


Figure 2　否定項目　中・高・大学生の類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



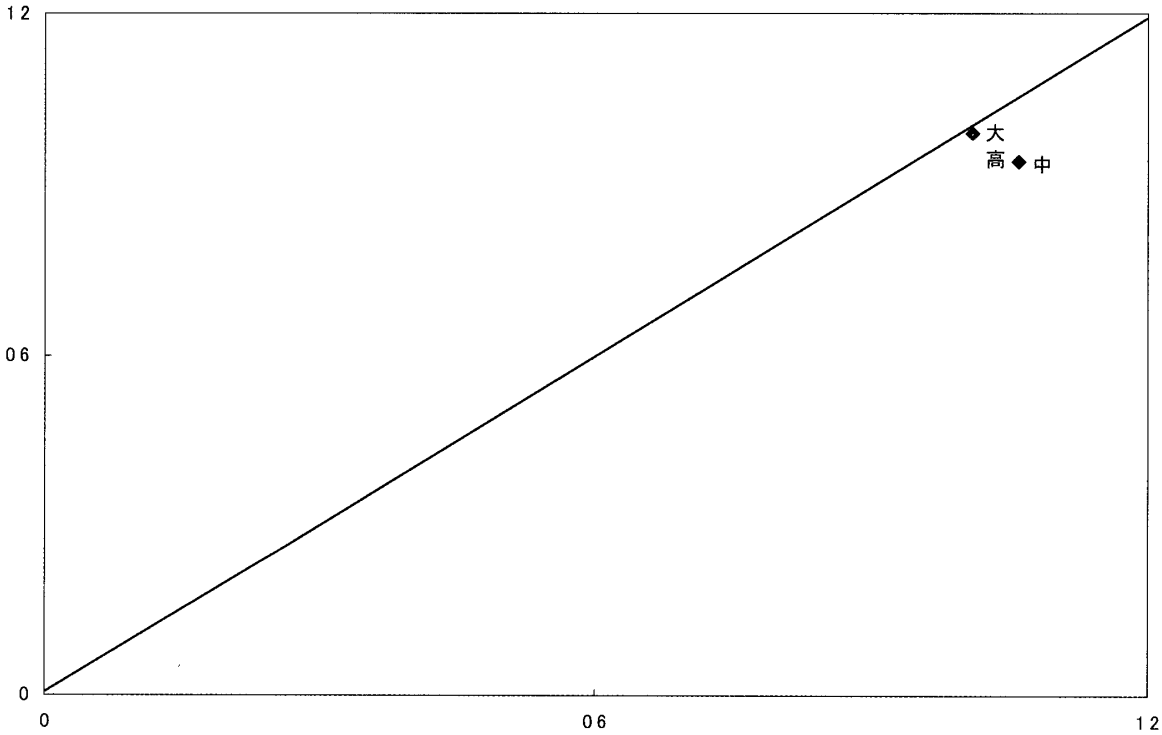
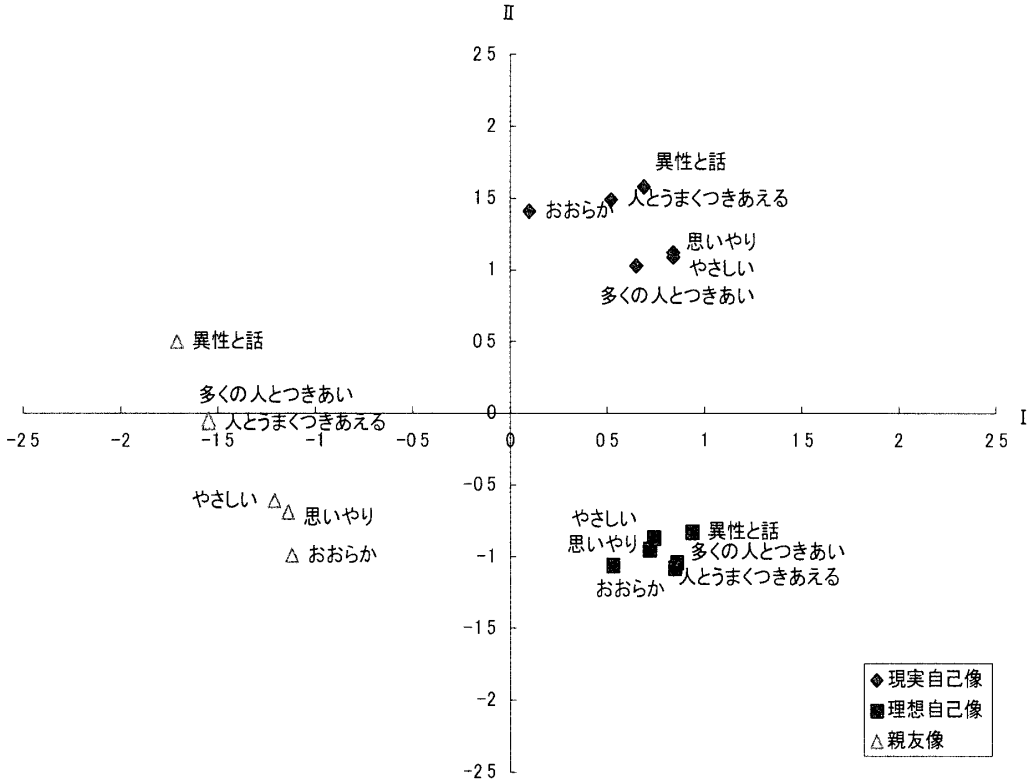


Figure 3　社会的側面　中・高・大学生の類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



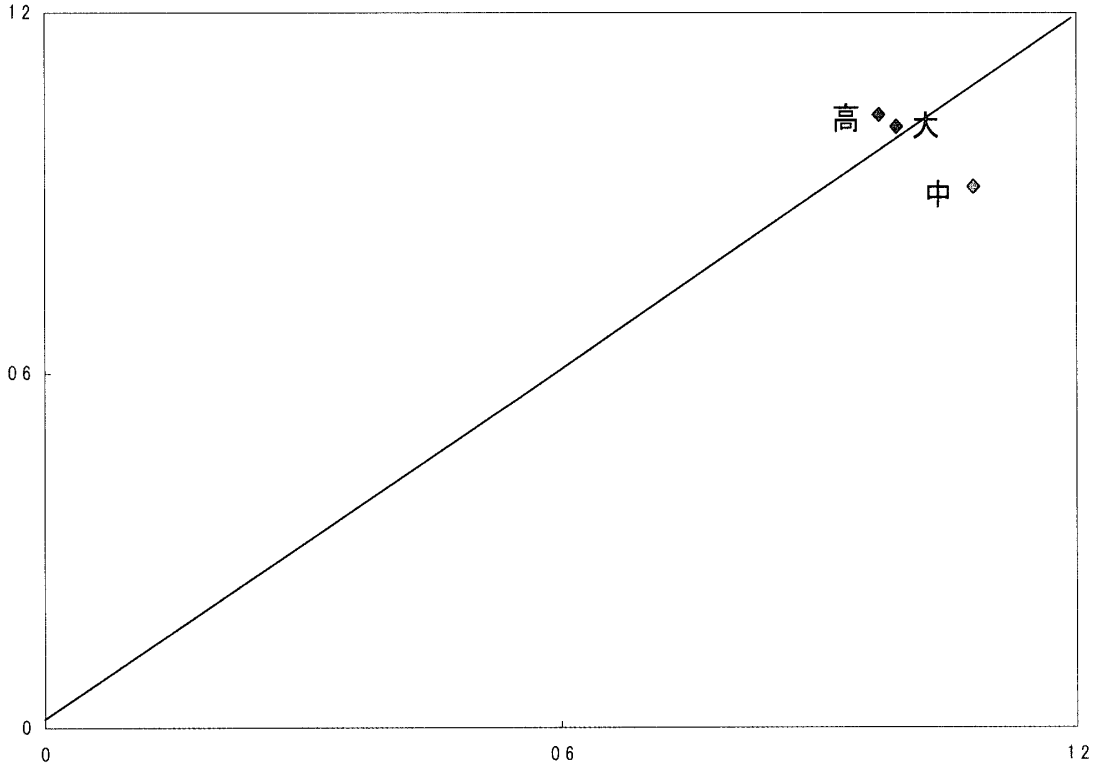
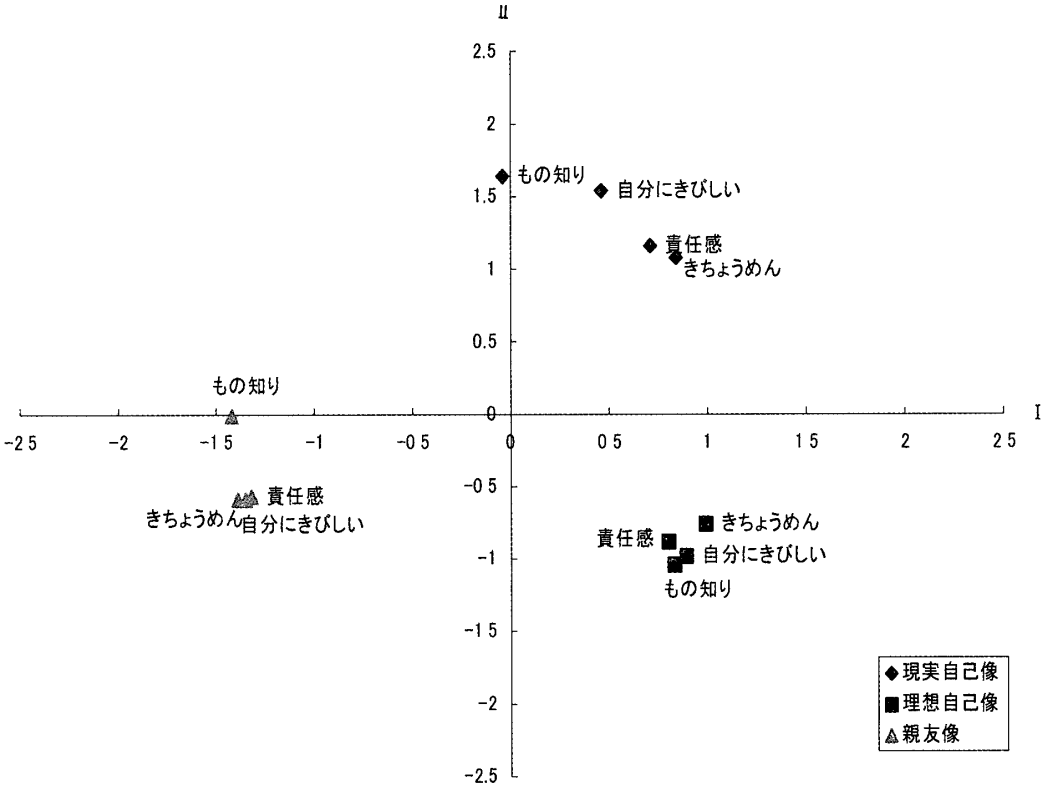


Figure 4　心理的側面　中・高・大学生の類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



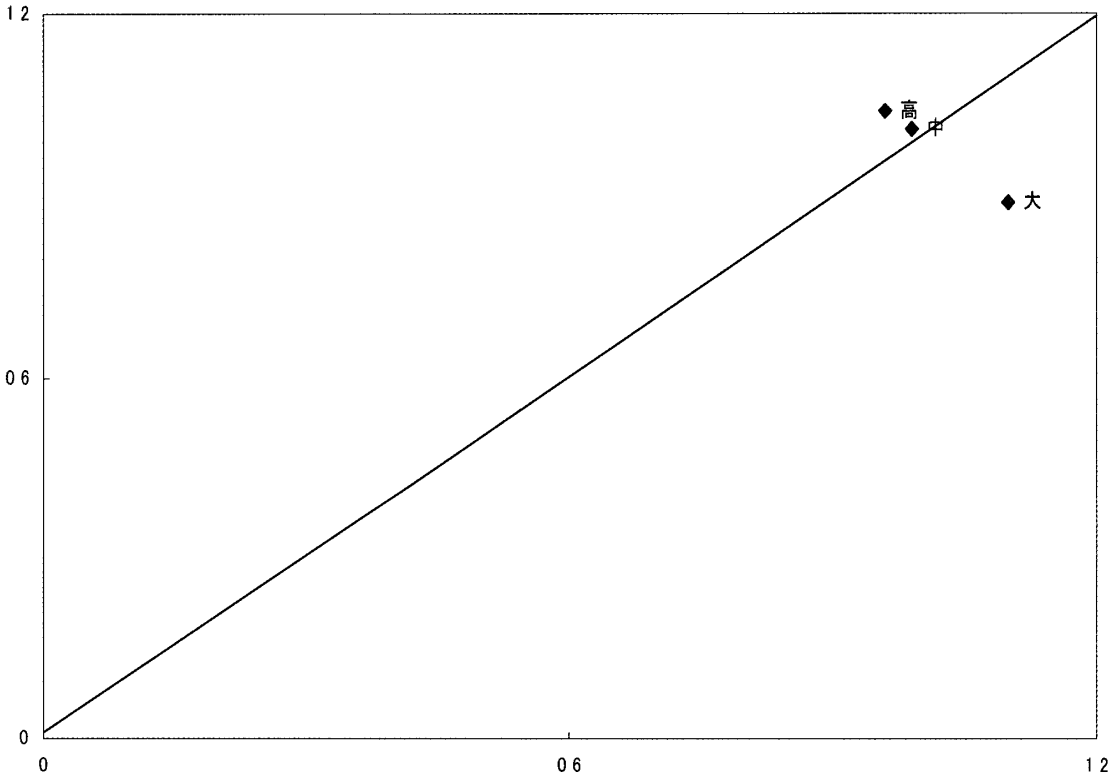
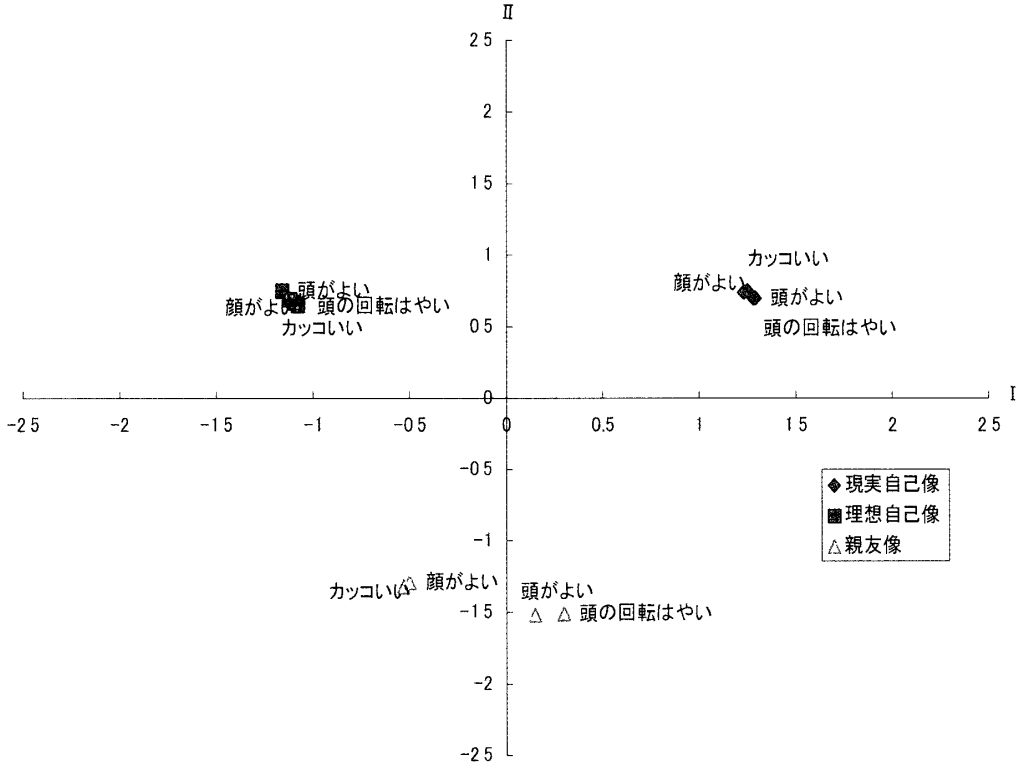


Figure 5　身体的側面　中・高・大学生の類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



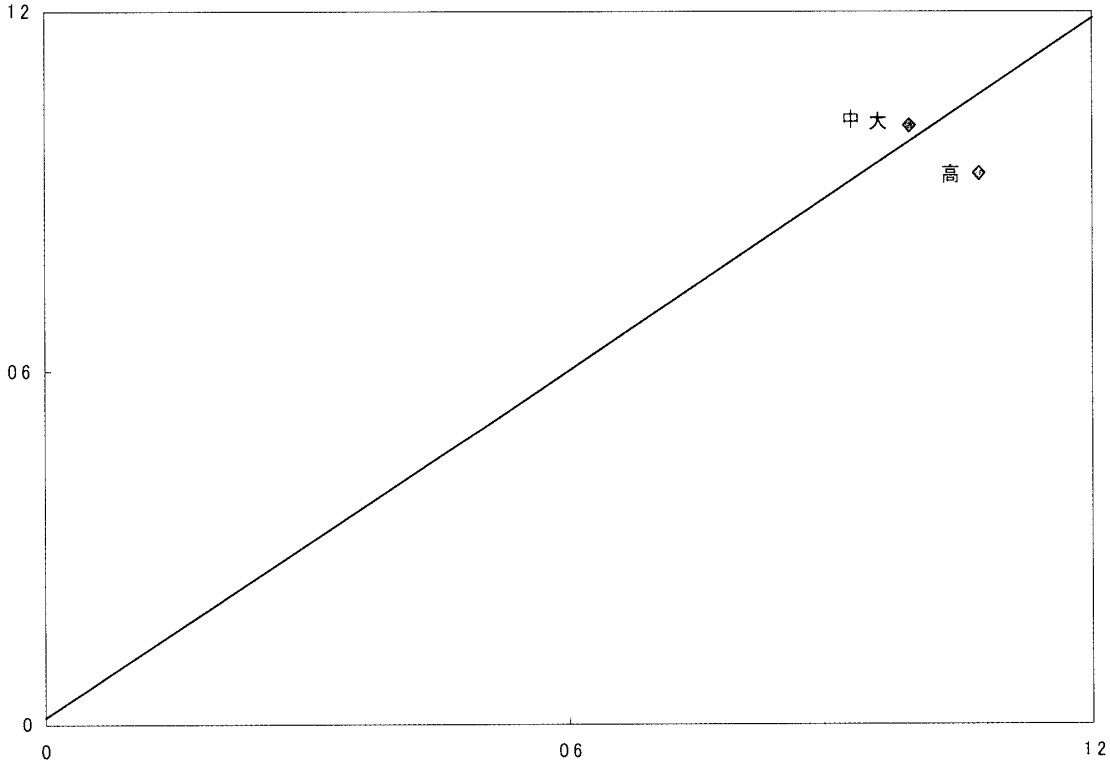
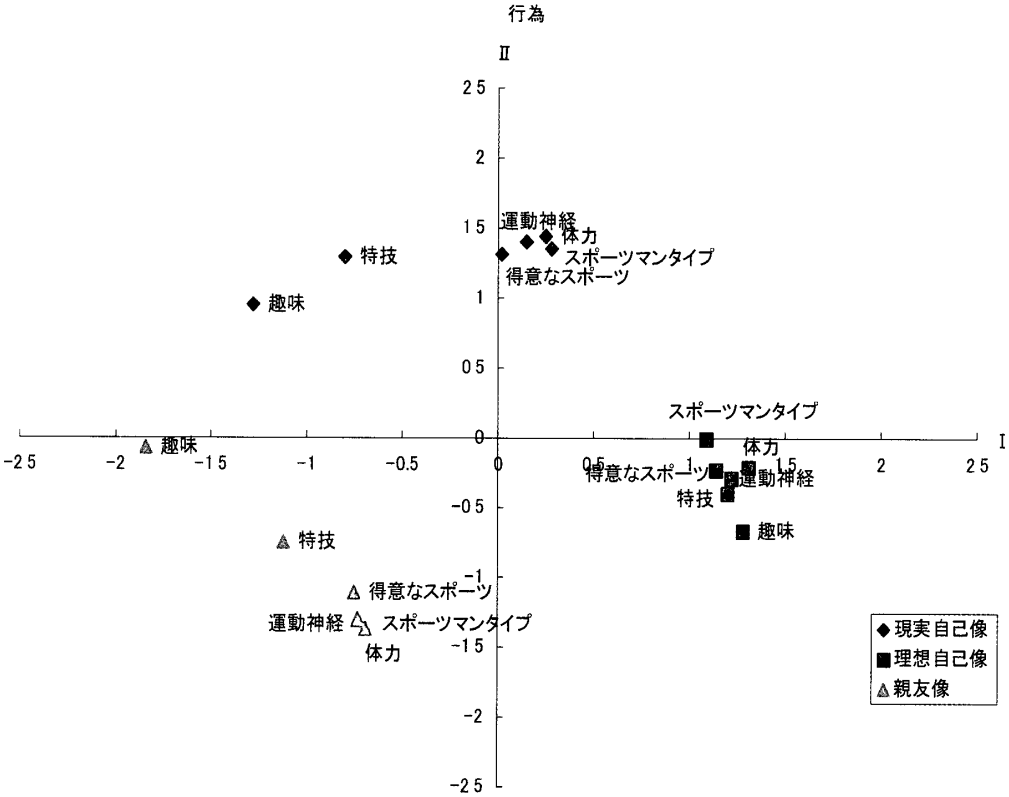
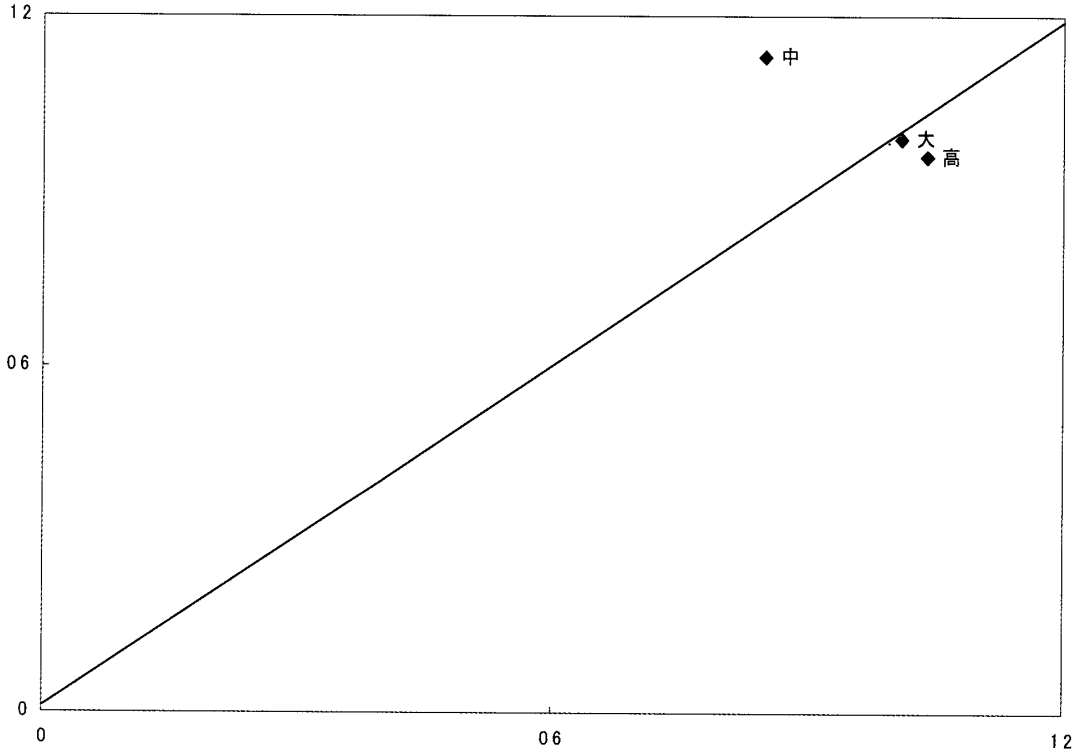


Figure 6　行為的側面　中・高・大学生の類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）





た。また第２軸はより理想自己像と親友像が低い値の方向に，現実自己像が高い値の方向に布置されており，現実自己像から親友像及び理想自己像を区別する軸と考えられた。重みづけ係数のプロットからは各学校段階ともすべて対角線よりも第２軸に重みづけられる方向に布置されていた。

否定項目（Figure２）では第１軸が同じく現実対想像を区別する軸，第２軸が現実自己像から理想自己及び親友像を区別する軸と考えられた。重みづけ係数のプロットからは各学校段階とも，対角線よりも第１軸に重みづけられる方向に布置されていた。

側面別自己概念については以下の通りとなった。社会的側面（Figure３）では第１軸が現実自己・理想自己像対親友像を区別する軸，第２軸が現実自己像から埋想自己及び親友像を区別する軸と考えられた。高校・大学で第２軸，中学で第１軸に重みづけられていた。心理的側面（Figure４）においては，第１軸が現実自己・理想自己像と親友像を分ける軸であり，第２軸が現実自己像から理想自己及び親友像を区別する軸で，中学・高校では第２軸に重みづけられ，大学では第１軸に重みづけられていた。

身体的側面（Figure５）においては，第１軸は理想自己－現実自己像の対極の中央付近に親友像が位置づけられ，各像を区別する軸，第２軸は現実自己・理想自己像－親友像を区別する軸と考えられた。中学・大学では第２軸，高校は第１軸に重みづけられていた。

行為的側面（Figure６）においては，第１軸は身体的側面の第１軸同様，各像を区別する軸，第２軸は現実自己像から理想自己及び親友像を区別する軸と考えられた。中学では第２軸に重みづけられていた。

５　現実自己・理想自己・親友像と友人関係

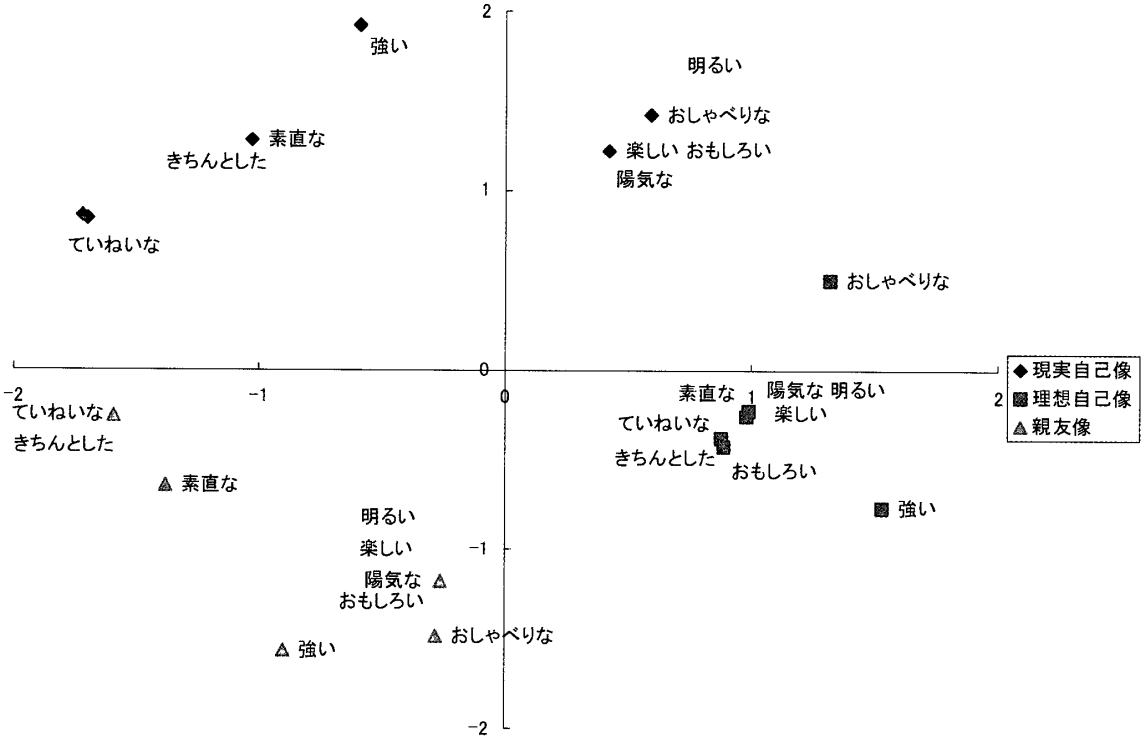
現実自己，理想自己，親友像と友人関係尺度の相関係数をTable11に示す。ここに見られるように，すべて絶対値が．３未満で，高い相関関係は見られなかった。

次に，各学校段階ごとに，友人関係尺度の各下位因子の第１，第４四分位数から回答者を下位群，中位群，上位群に分け，肯定，否定項目および側面別に，項目×学校段階ごとの上中下位群間の相関行列を非類似性の行列に変換したものを入力データとした個人差多次元尺度法による分析を行った（Figure７～18）。

「軽躁的関係」得点の上下に基づく群を入力データとした場合には，肯定項目，否定項目，社会的側面，心理的側面で，いずれも第２軸で，親友像・理想自己像と現実自己像を分ける軸が見出された（Figure７～10）。

重みづけプロットについては，以下の群でそれぞれ対角線よりも親友像・理想自己像と現実自己像を分ける軸（第２軸）に重みづけられていた。すなわち，肯定項目での，中学の下位及び中位群，大学の中位及び上位群，否定項目での高校・大学の下位群，社会的側面での高校の下位群と中位群，大学の中位群，心理的側面で，中学の上位群，高校での中

Figure 7　肯定項目　・軽躁的関係の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



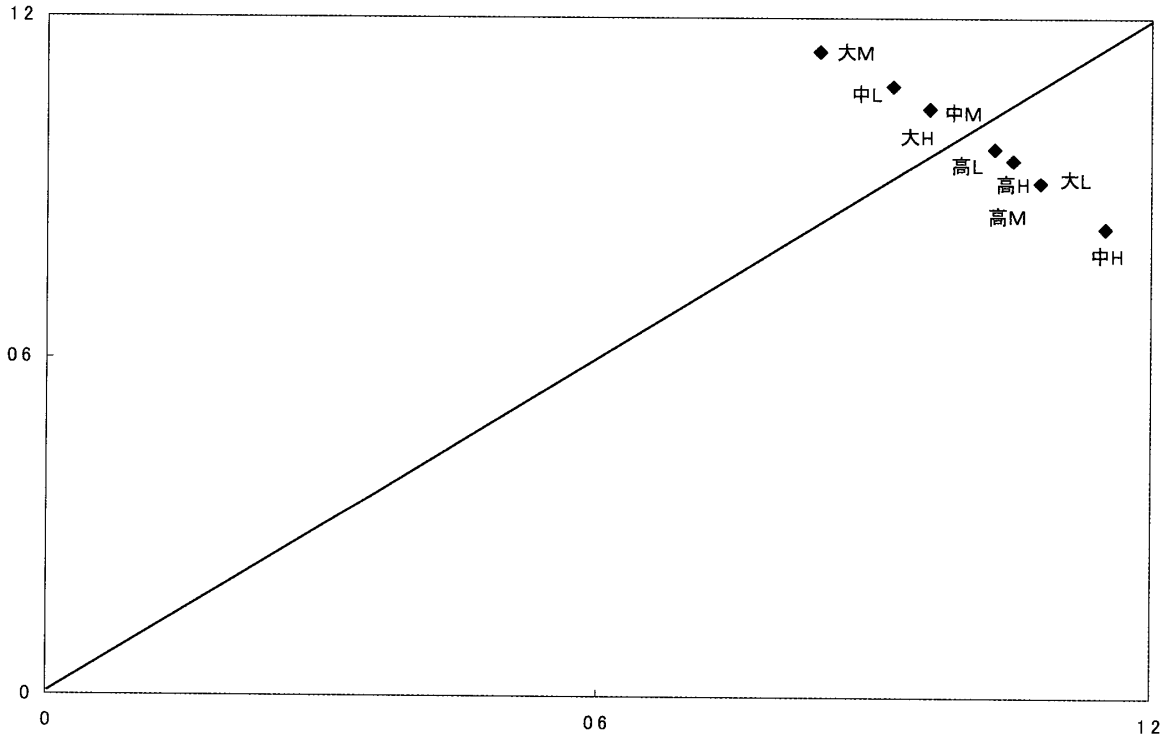
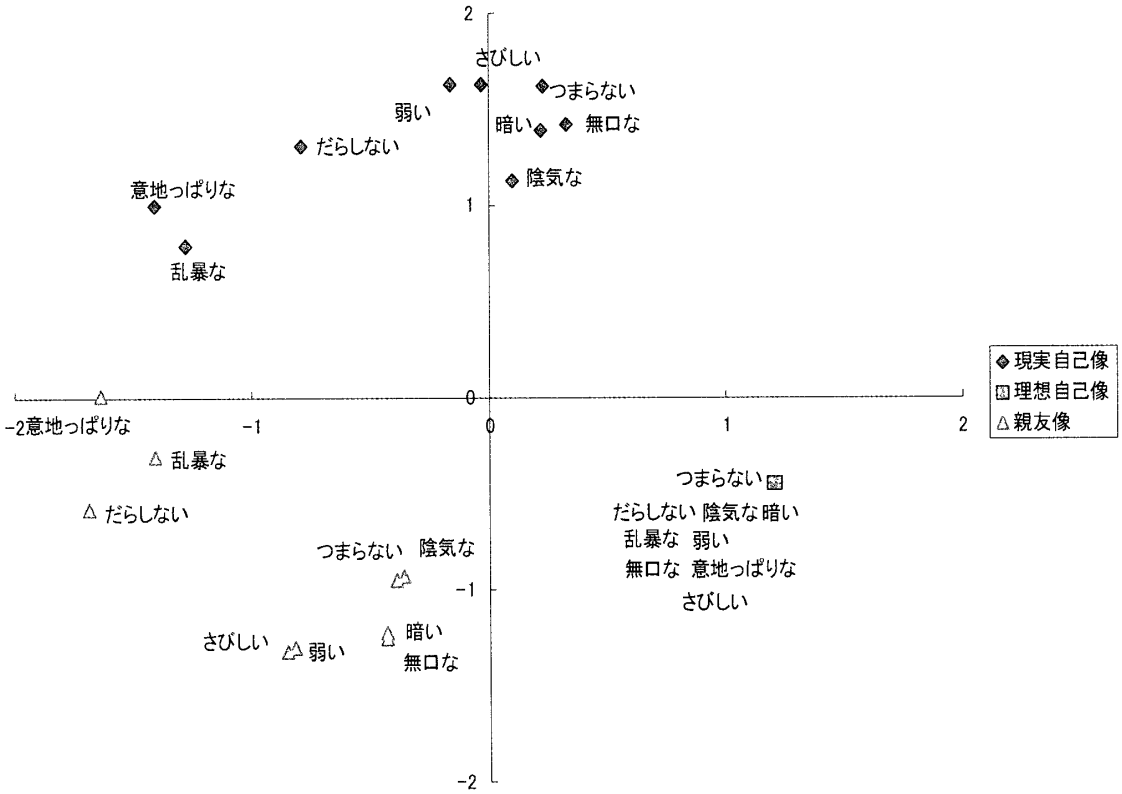


Figure 8　否定項目　・軽躁的関係の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



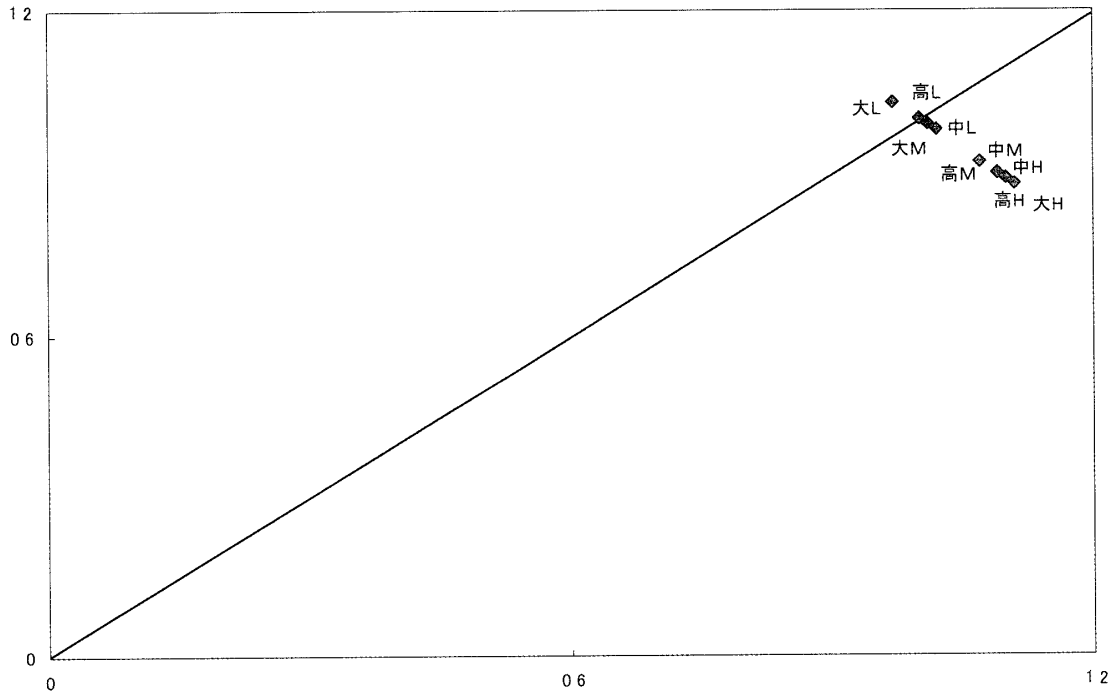
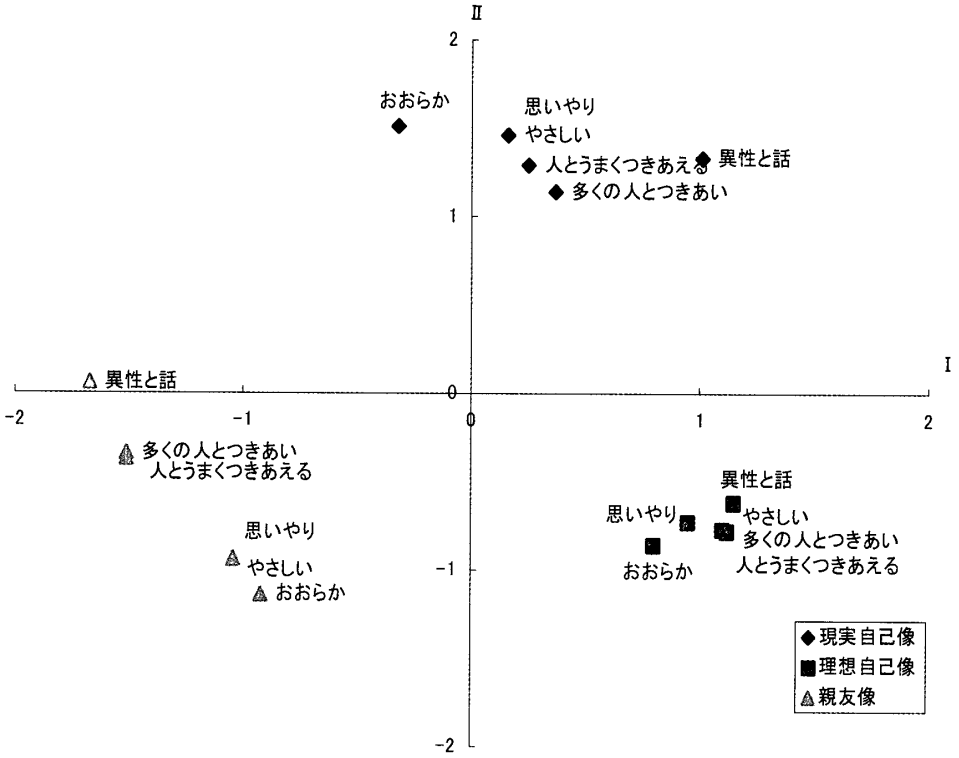


Figure 9　社会的側面　・軽躁的関係の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



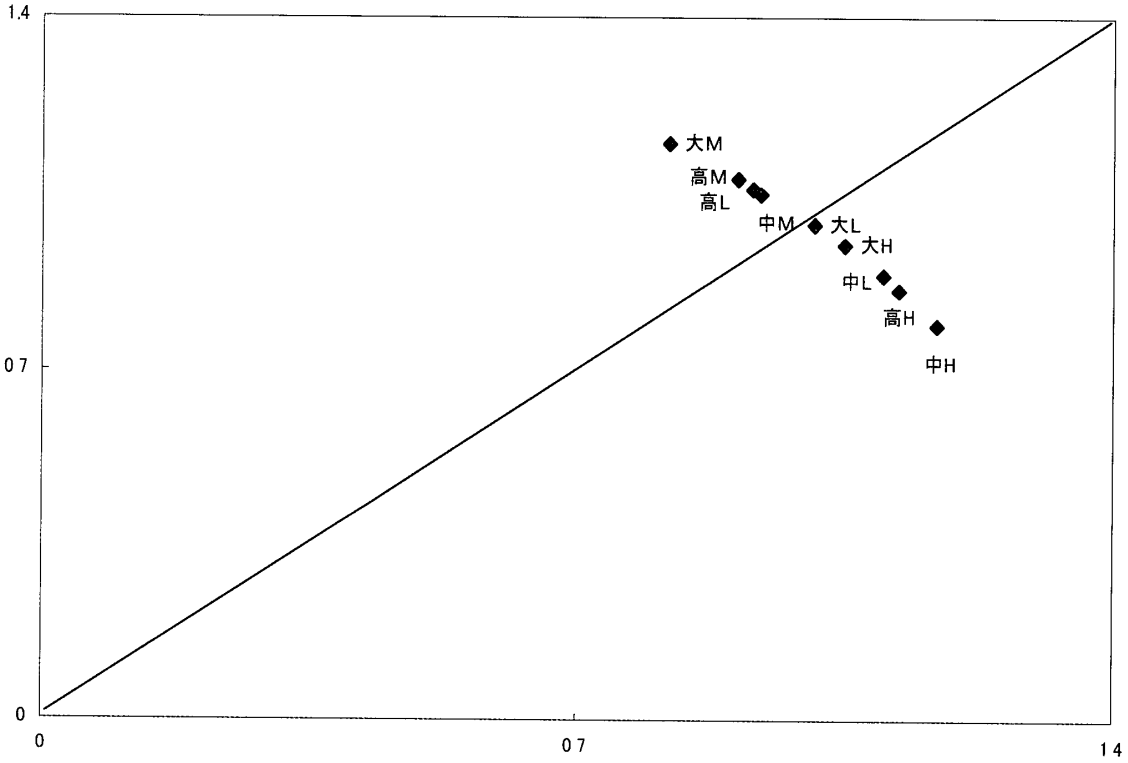
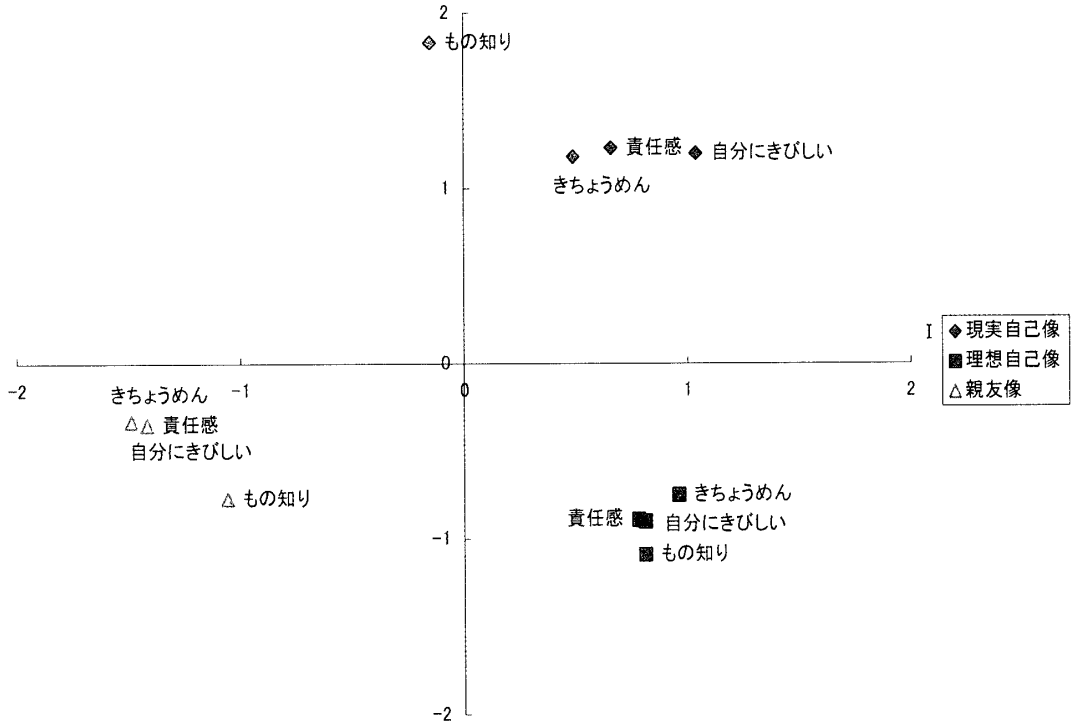


Figure10　心理的側面　・軽躁的関係の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



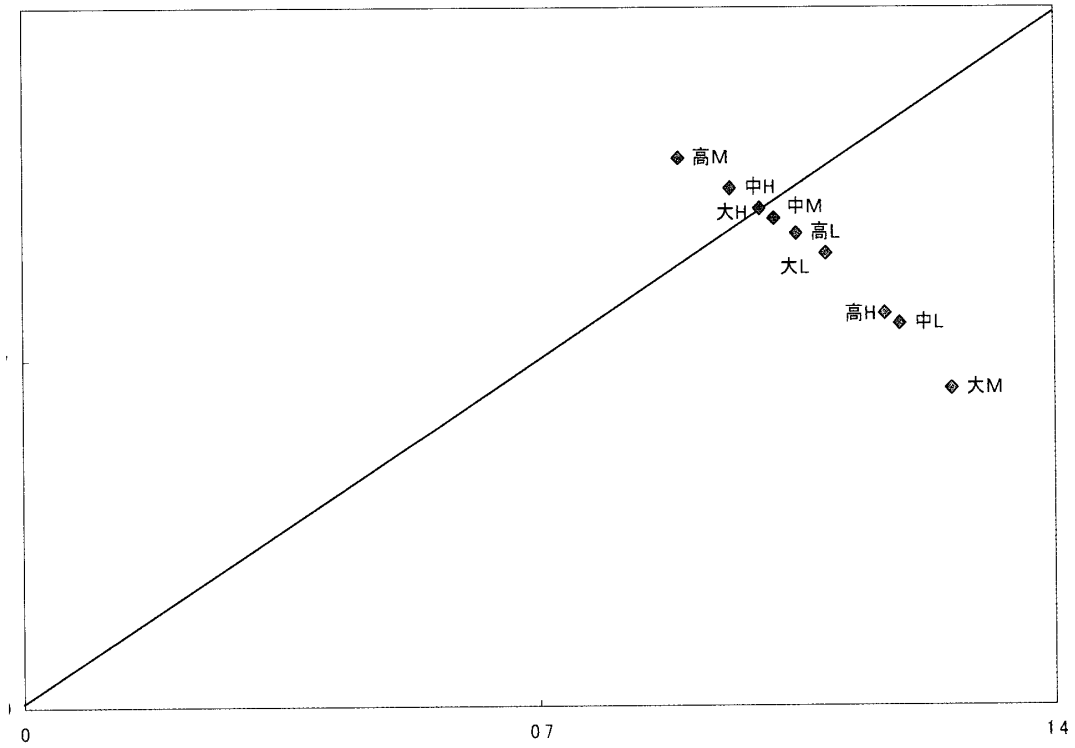
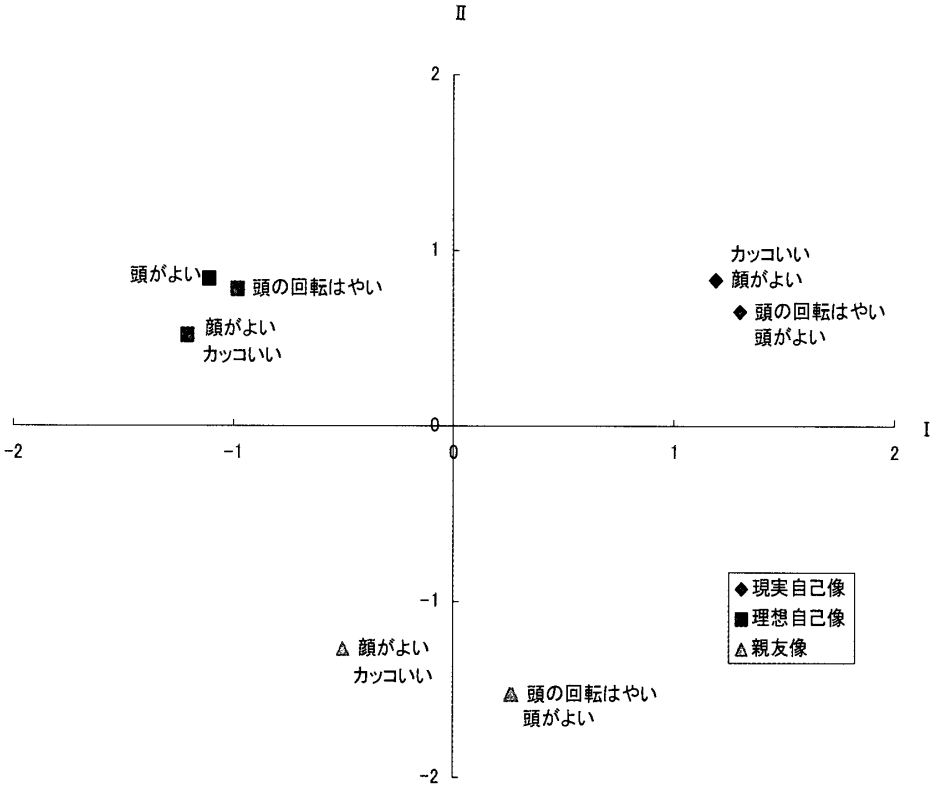


Figure11　身体的側面　・軽躁的関係の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



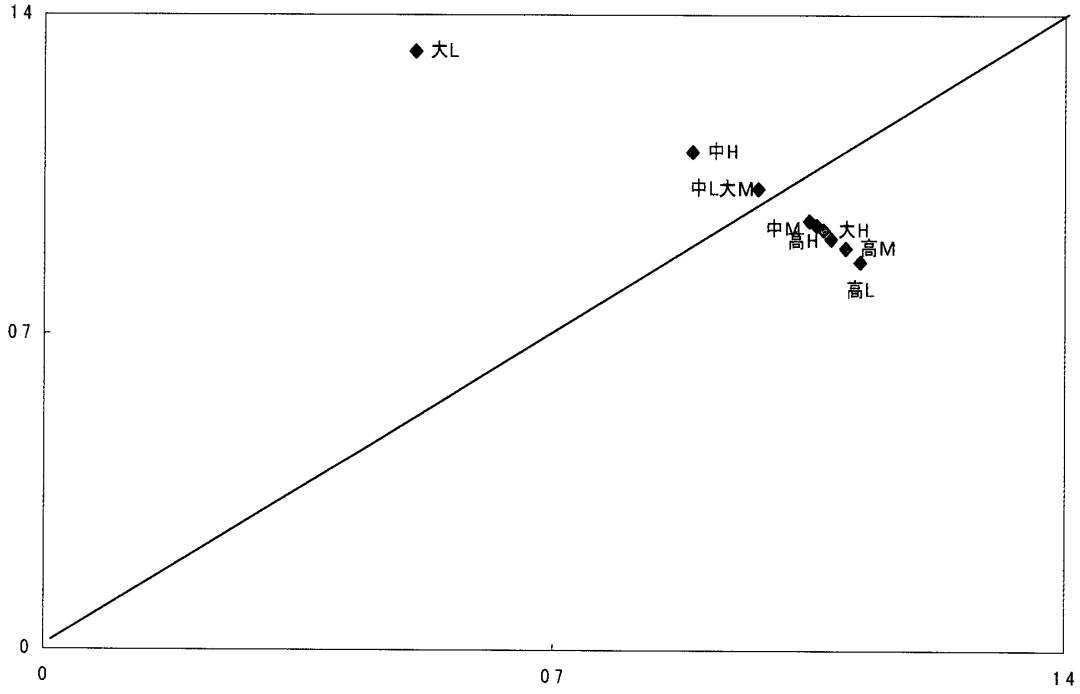
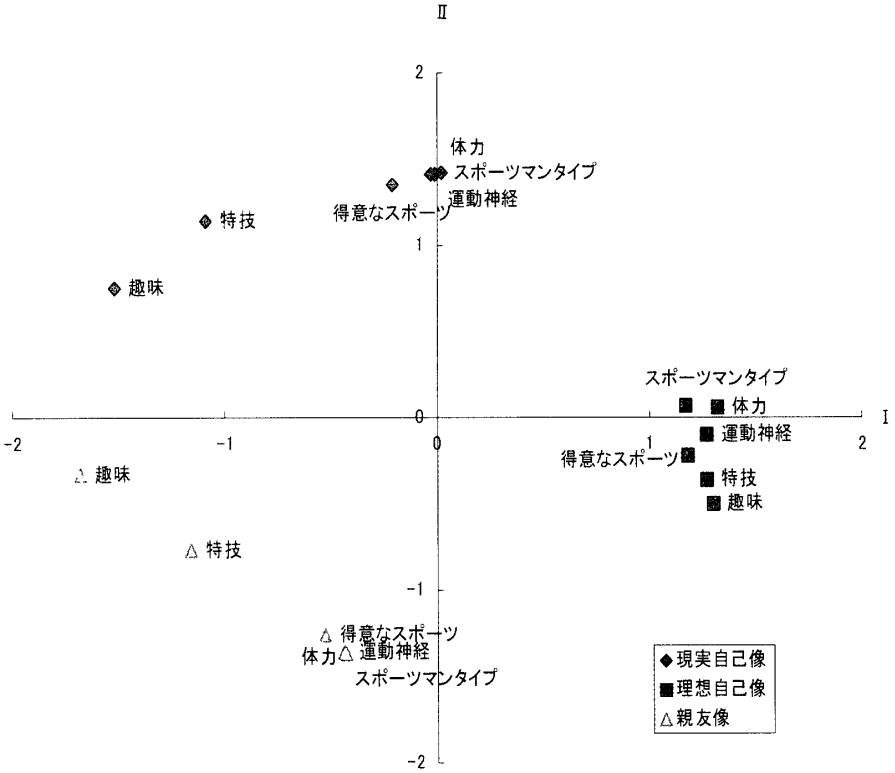


Figure12　行為的側面　・軽躁的関係の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



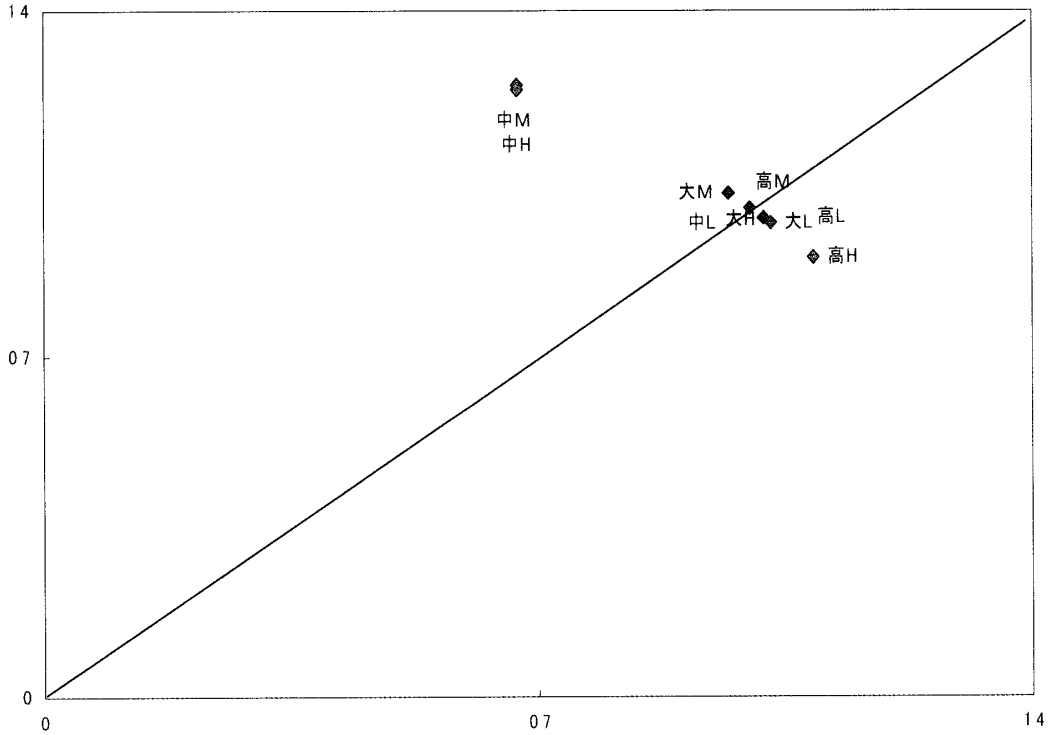
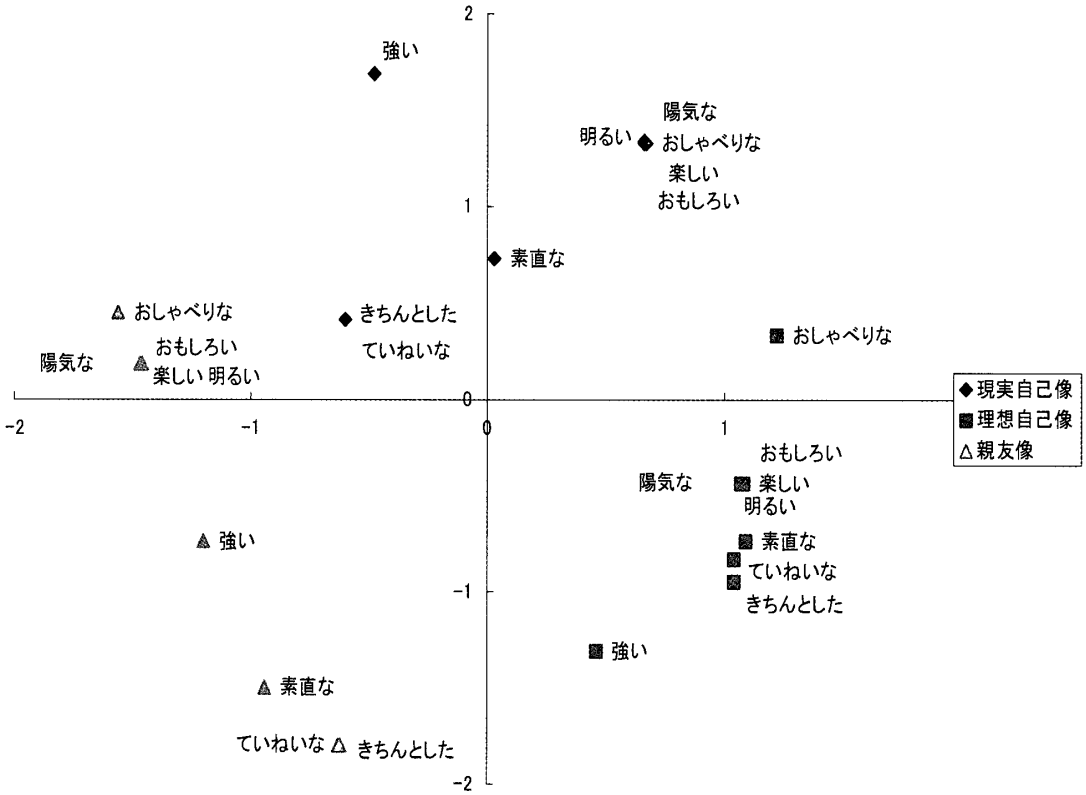


Figure13　肯定項目　・侵入回避の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



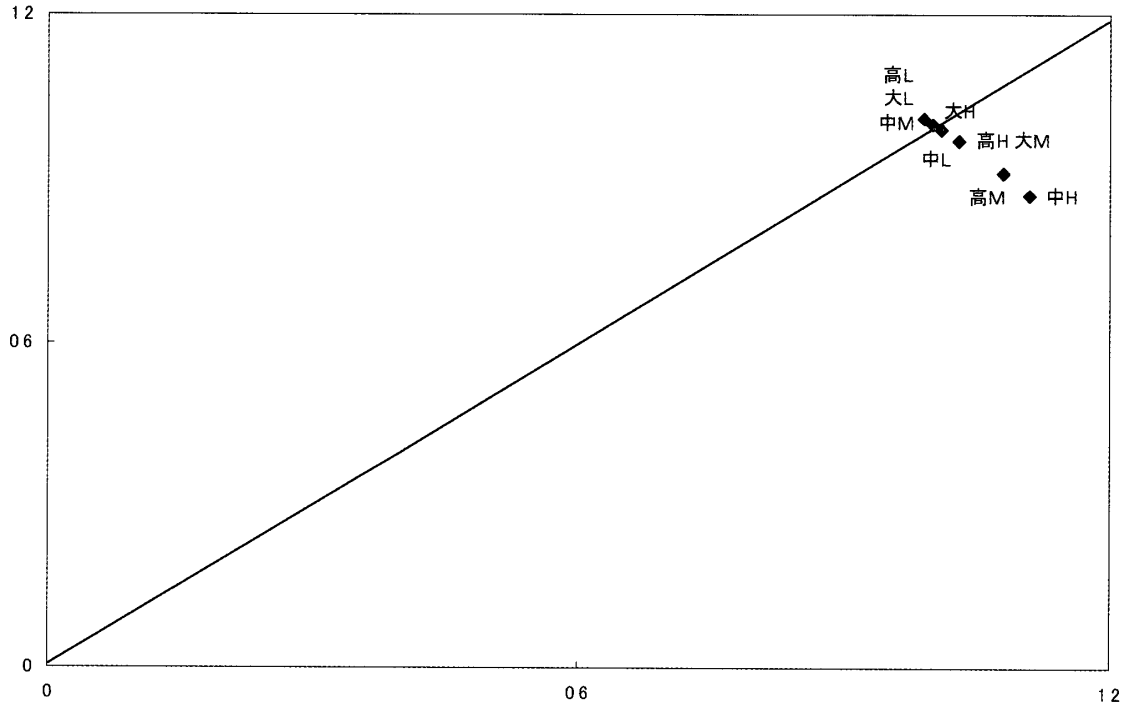
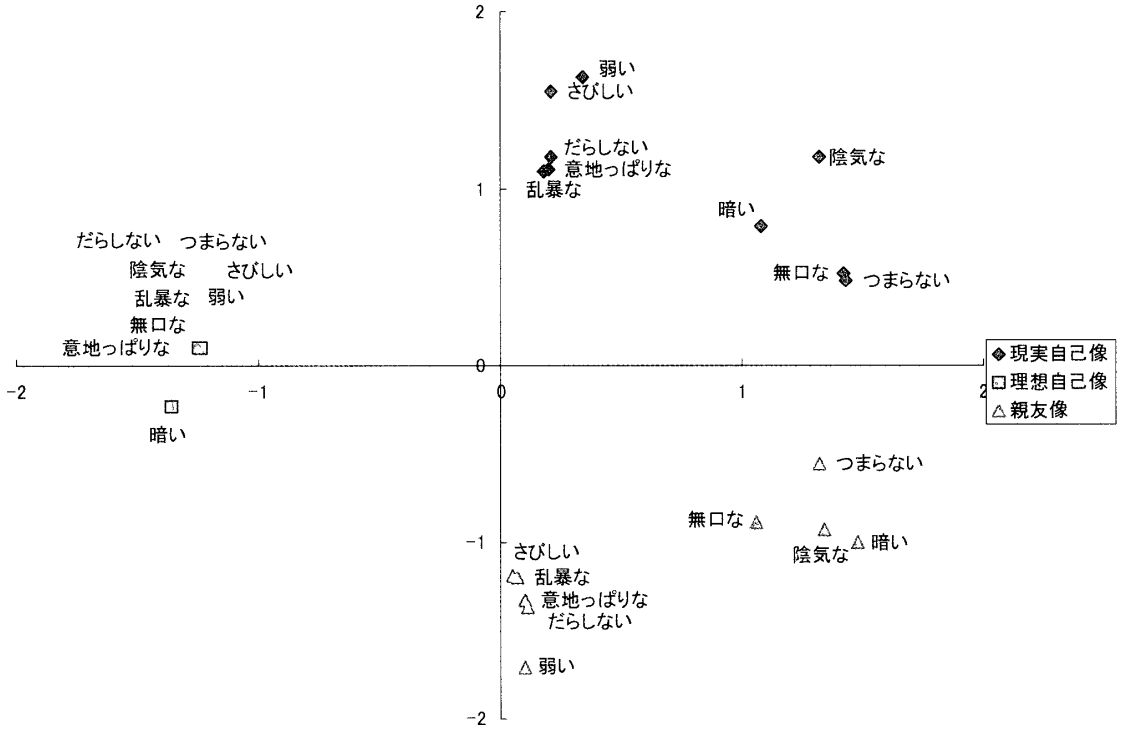


Figure14　否定項目　・侵入回避の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



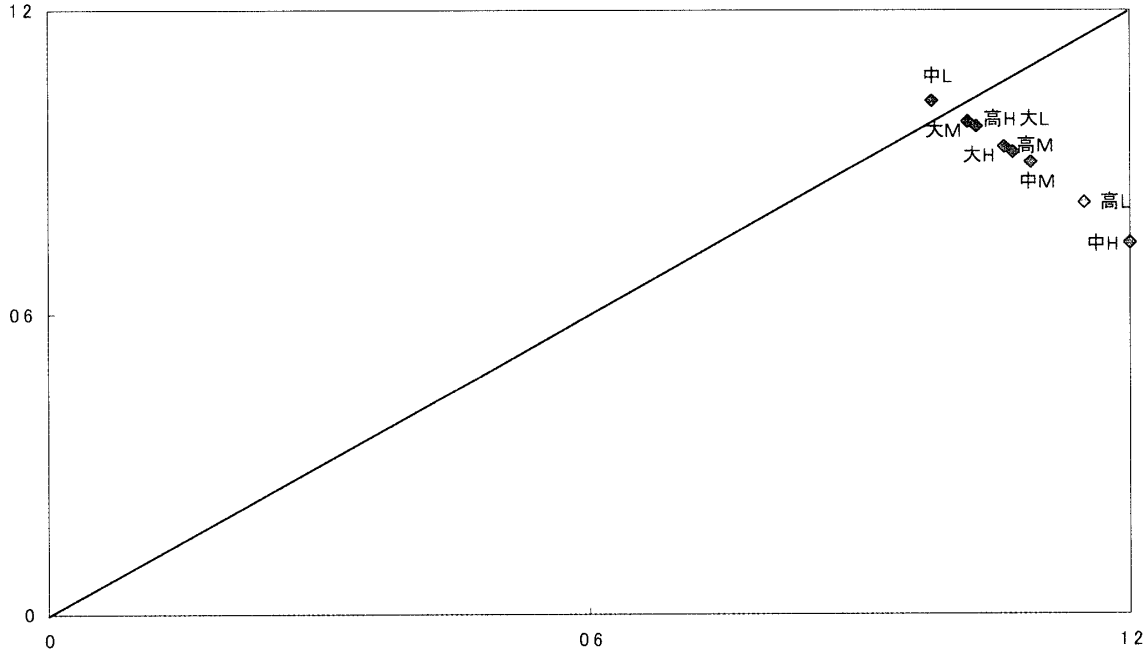
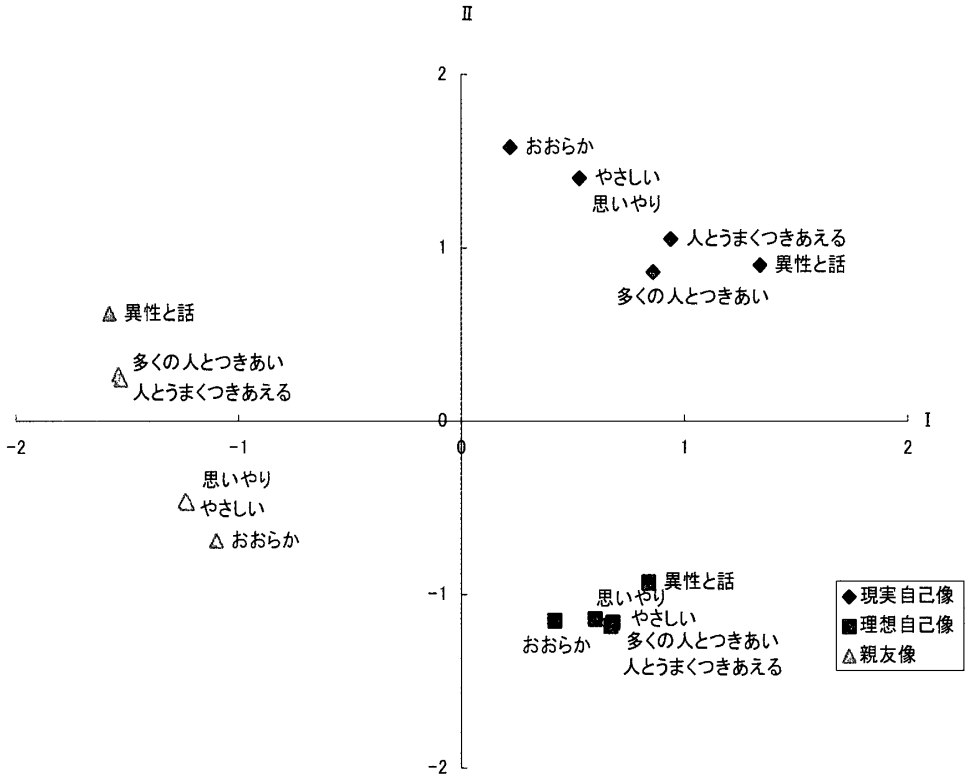


Figure15　社会的側面　・侵入回避の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



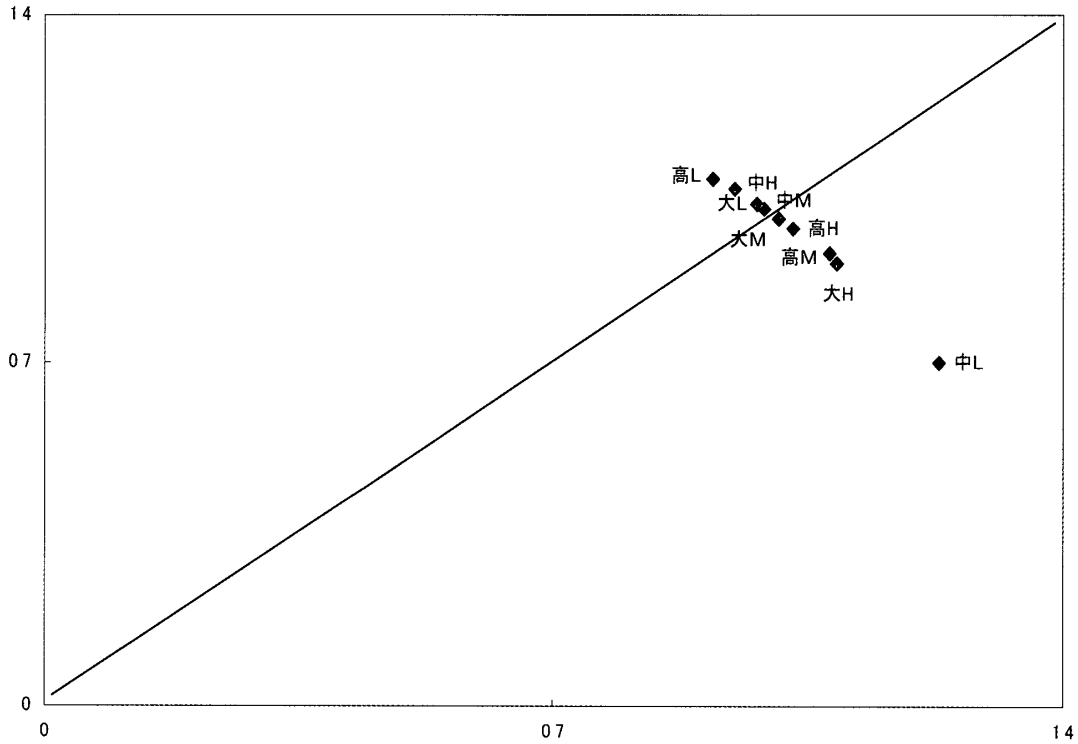
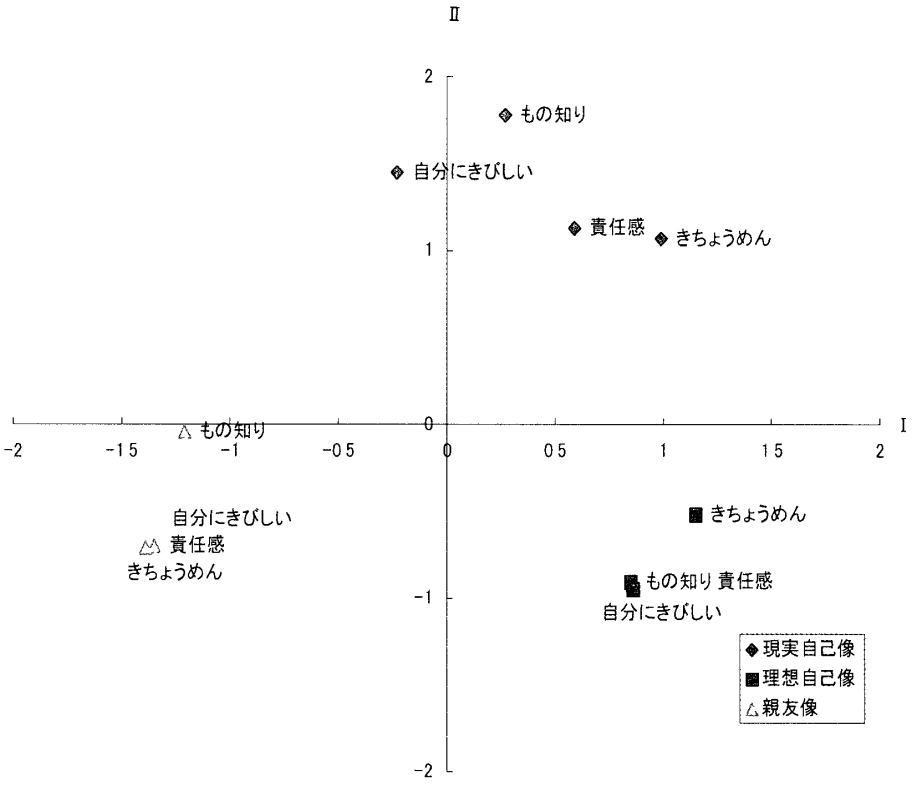


Figure16　心理的側面　・侵入回避の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



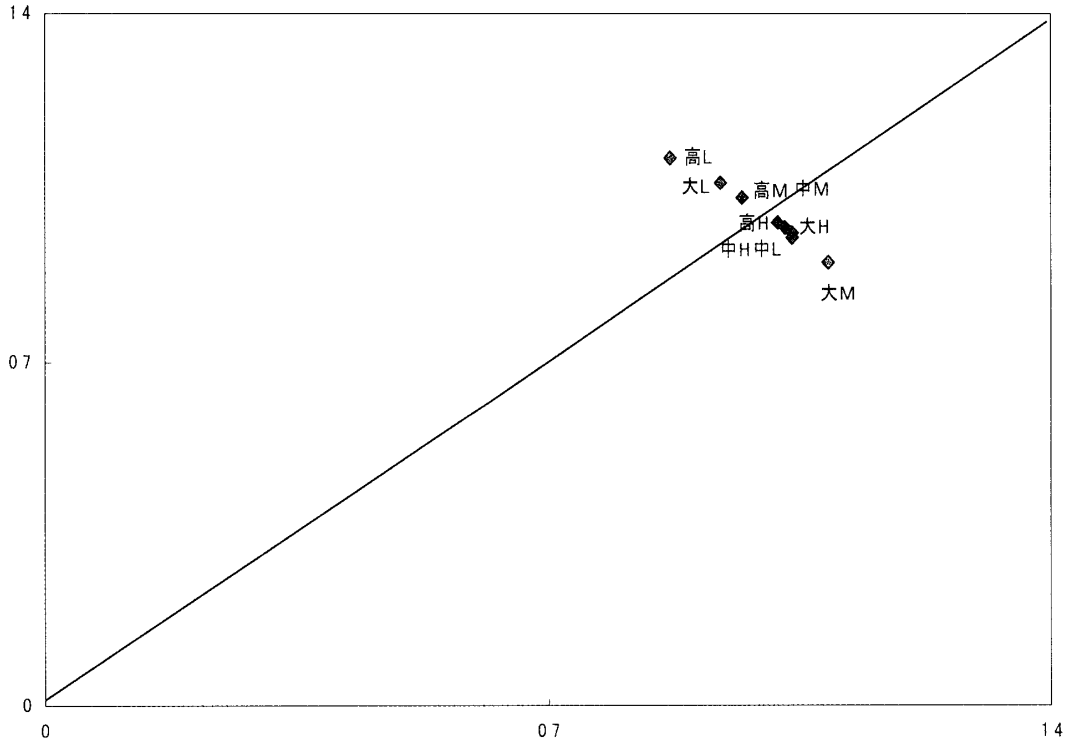
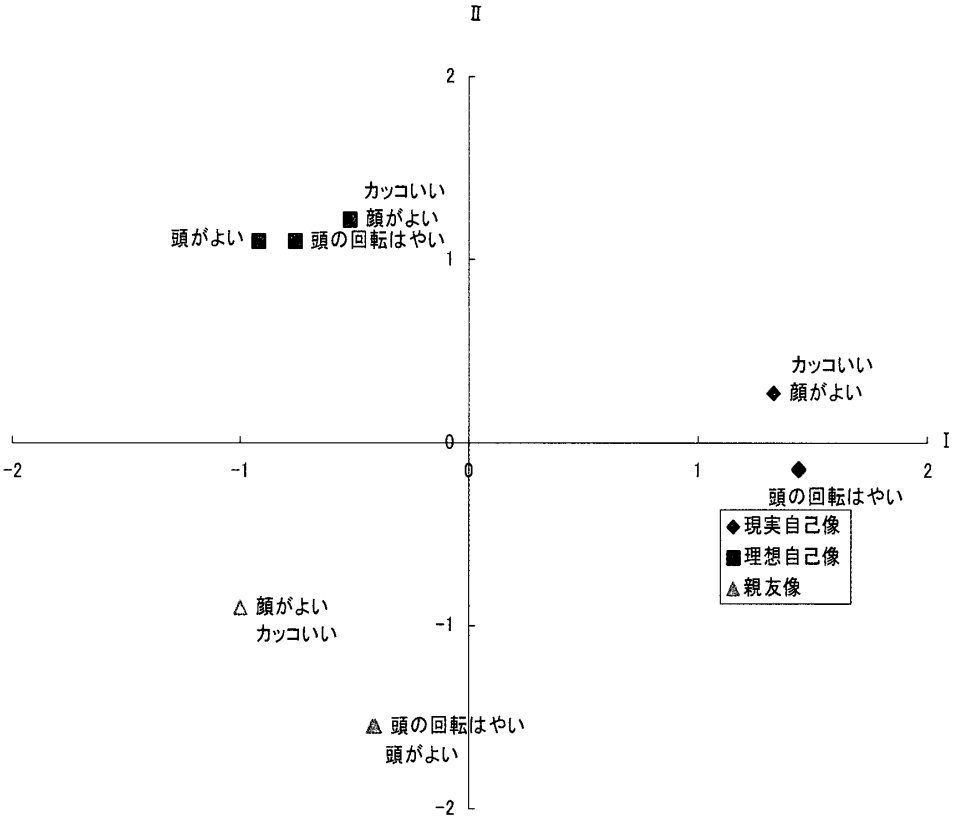


Figure17　身体的側面　・侵入回避の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）



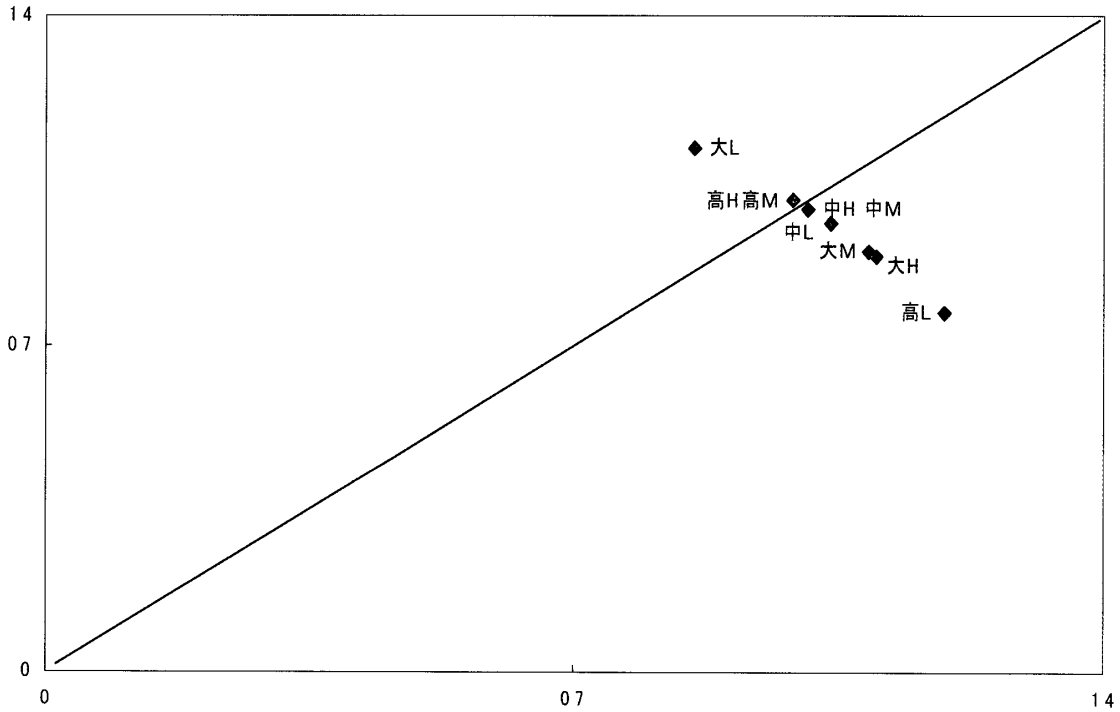
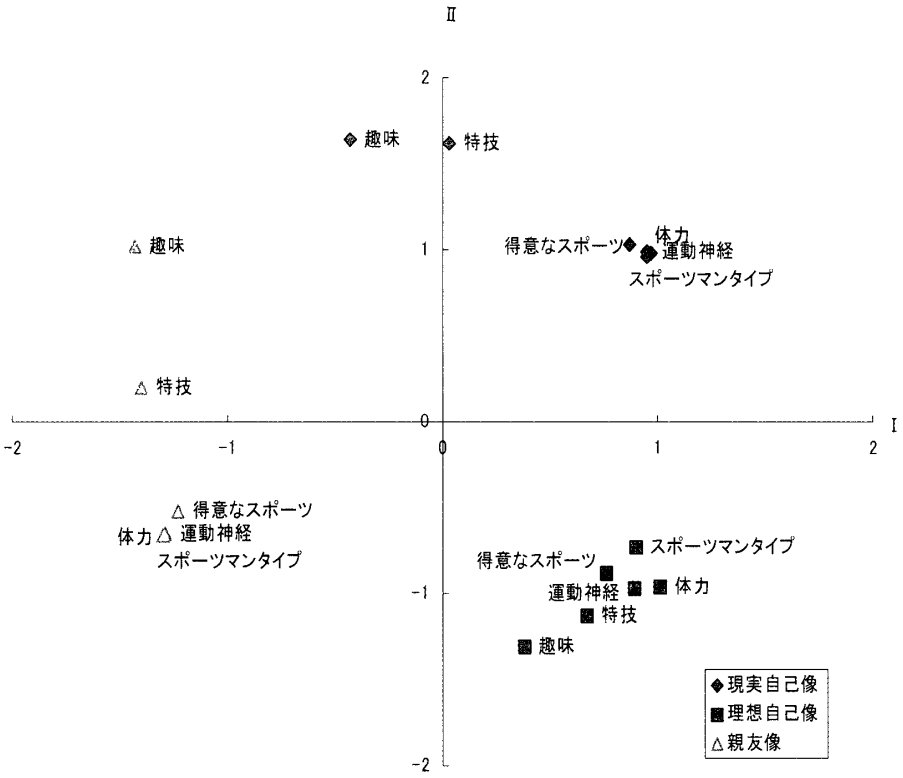
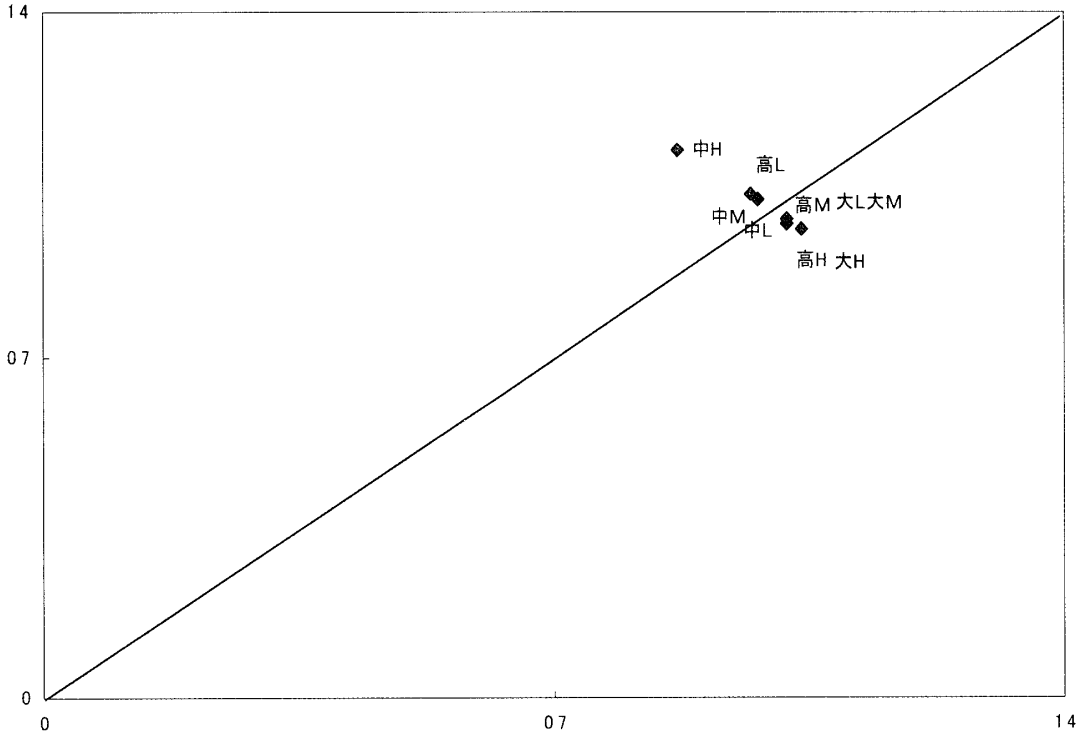


Figure18　行為的側面　・侵入回避の上中下位群による類似性の布置（上）と重みづけプロット（下）





位群の各群である。

「侵入回避」得点の上下に基づく群では，肯定項目（Figure13）及び心理的側面（Figure 16）の第２軸，身体的側面（Figure17）の第１軸が，親友像・理想自己像と現実自己像を分ける軸と考えられた。

重みづけプロットについては，以下の群でそれぞれ対角線よりも親友像・理想自己像と現実自己像を分ける軸に重みづけられていた。すなわち，肯定項目での中学の中位群，高校・大学の下位群，心理的側面での中学の中位群，高校の下位群と中位群，大学の下位群，身体的側面では中学の中位群と上位群，高校の下位群，大学の中位群と上位群で，それぞれ対角線よりも親友像・理想自己像と現実自己像を分ける軸に重みづけられていた。これらの結果をまとめ，親友・理想自己像対現実自己像の軸に重みづけが顕著だった群の一覧を Table11に示す。

考　察

1　学校段階差

充実感尺度については，「自立・自信」得点において大学が他の年代より有意に高かった。また，「連帯」得点で中学が他の年代より有意に高く，「充実感気分」も中学の方が傾向差ながら高校よりも高い得点を示していた。このことは，発達とともに，自立感・独立感が増大する一方で，他者との関わりに対してはより敏感になり，孤立感を感じる傾向が顕著になることを示している。

大野（1984）は充実感尺度と Erikson（1959）の漸成発達理論を対応づけ，「自立・自身－甘え・自信のなさ」が青年期の主題である自我同一性統合，「連帯－孤立」が成人期初期の主題である「親密さ対孤立」に，また「信頼・時間的展望－不信・時間的展望の拡散」が乳児期の基本的信頼感が青年期に反映された「時間的展望対時間的展望の拡散」にそれ

Table11　親友・理想自己像－現実自己像の軸に重みづけが顕著だったもの

全体			軽躁的関係による群			侵入回避による群		
中	高	大	中	高	大	中	高	大
P	P	P	PLM		PMH	PM	PL	PL
-	-	-	-	NL	NL			
-	社	社	-	社LM	社M			
心	心	-	心H	心M	-	心M	心LM	心L
	-	-	-	-	-	身MH	身L	身MH
行								

P：肯定的自他概念，N：否定的自他概念，心：心理的側面，社：社会的側面，身：身体的側面

L：友人関係尺度下位群，M：同中位群，H：同上位群

ぞれ対応するとしている。しかし本研究の結果からは，こうした対応関係を示唆する結果は得られなかった。

友人関係尺度では，軽躁的な関係が高校で一時的に高まる傾向が見られ，また「侵入回避」に示されるような他者と内面的な関わりを避ける傾向は年代とともに高くなることが示された。充実感の学校段階差とも併せて考えると，青年期後期の者は，対人関係での不適応感が高く，対人関係とは切り離した個人内部での適応をはかろうとする傾向を持つものと考えられる。

2　友人関係と適応

（1）適応指標間の相関関係からは，現実自己像と充実感尺度（とくに「信頼感・時間的展望」下位尺度）の間には．3以上の相関関係が見られたが，Dスコアと充実感の間ではこうした関係は見られなかった。充実感尺度は自覚的な適応感を測るものであるため，Dスコアと異なり直接的な自分の状態についての評定である現実自己像との関連が見られたものと考えられる。とくに充実感尺度のうち「信頼感」は，「生まれてきてよかったと思う」「私は価値のある生活をしていると思う」など自尊感情に近い内容の項目であり，Dスコアよりも現実自己像そのものの方がより自尊感情に関わりがあることが示唆された。

否定項目での現実自己像については，肯定項目とは異なり，充実感尺度の「信頼・時間的展望」との相関は低く「連帯」との高い相関関係が見られた。このことは，次のように考えることができる。すなわち，肯定項目で自己を高く評定することは，ニュートラルな状態を原点にして，自分自身をより肯定的にみなすことであり，自尊感情の高さ（「信頼感・時間的展望」得点）と一致する。しかし，否定的な側面はむしろ，ニュートラルな状態を原点にして，より否定的な方向についての評定であり，これについて「あてはまらない（否定的でない）」と評定することも，ニュートラルな状態に近いとことを意味するにすぎず，必ずしも自己を肯定的に評定することにはならない。よって否定項目が肯定項目のように「信頼・時間的展望」との相関をもたなかったものと考えられる。一方「連帯」尺度はすべての項目が否定的な文（逆転項目）から成り，両者ともにニュートラルな状態より否定的な状態にかけての測度であったため，両者の相関が高くなったものと考えられる。

（2）友人関係尺度と各適応指標の関係からは，仮説とは異なり，現代的な友人関係を取る者ほど適応の程度が低いといった一意的な関係は見られなかった。「軽躁的関係」と現実自己像の間では，仮説とは逆にむしろ軽躁的関係を取る者ほど，肯定項目および社会的側面で得点が高く，自分自身に対して肯定的で，円滑な対人関係を取れると認知していた。このことは，友人との間で群れて楽しさを追求するような関係を取る者は，仮説とは異なり適応感が高いということができる。

しかし高校段階の心理的，身体的各側面においては，下位群よりも上位群の方がDスコアが大きかった。高校においては，肯定項目や社会的側面では，自己を肯定的で社会性が高い方向に認識するポジティブ幻想としての適応を示す反面，自分自身の性格など心理的側面においては，理想像との隔たりを持ち，自己不一致状態にあるものと考えられる。

柄谷（2000）は，現代の青年の明るいが深く関わらない傾向（同調的引きこもり）それ自体は，現代に特徴的なものではなく，古くからあるムラ共同体での人間関係の残遺であると指摘している。すなわち世間の評判が個人に大きな意味を持つムラ共同体では，常に世間から肯定的に見られるよう，適応的に振る舞わなければならず，反対に，本当の姿をさらけだして深く関わることは出来ない。現代の青年の対人関係は，これと同質のものであるとしている。本研究の結果は，こうした指摘と符合する。すなわち，自分自身の評価の基準となる世間＝友人との間で円滑な関係が取れることそのものは，個人の適応感を高める。一方，このように対外的（ないしは対世間的）に受け入れられるために自分自身を明るく演じるだけでは，個人内部の安定感，自己一致感は得られず，結果として，心理的側面での自己不一致につながると考えられる。こうした結果は岡田（1999）において，青年が内面的関係を取らないことが，青年自身の理想とは異なっているという結果とも符合する。

3　現実自己像・理想自己像・親友像間の相関関係

肯定項目，社会，心理及び行為的側面では，中学で現実自己－理想自己及び理想自己－親友の各像での相関が高く，このうち肯定項目と社会的側面では，大学においても中学と同様の関係が見られた。また高校段階では．4以上の相関が見られないなど，全体に相関関係が小さく，各像間の特徴が明確とはならなかった。これらの結果は岡田（1987）で見出された各像間の発達的関係とは異なる結果であった。このことは次のように考えることができる。まず，岡田（1987）で用いられたSelf－differential各因子は本研究においては肯定項目としてまとめられているため，岡田（1987）での各因子の特質が複合されたものと考えられる。一方，側面別自他概念における社会的側面は，中学生で現実自己，理想自己間及び理想自己，親友像間での相関が高く，大学生では現実自己－理想自己間の相関が高い点で，岡田（1987）での向性因子と類似した関係を示している。このことは，本研究での「社会的側面」が社交的な度合い，すなわち社会的外向性の項目から成ることによるものと考えられる。

一方，多次元尺度法によって，全年代での各像間の類似性の座標空間における各年代の位置づけを見たところ，各年代ごとで相関関係を個別に見た場合とは異なる結果が得られた（Figure 1 ～ 6）。すなわち，中学では，行為的側面と心理的側面，高校では心理的側面と社会的側面，大学では社会的側面が，それぞれ現実自己像から親友・理想自己像を区

別する軸への重みづけ得点が高かった。すなわち児童期までに顕在化するとされる行為的側面から，青年期前期に顕在化するとされる心理的側面，さらに青年期後期に顕在化するとされる社会的側面へと，発達的に異なる側面において，理想自己像と親友像が共通の枠組みとして認知されていた。このことから，親友像が理想自己像のモデルとなる側面は発達的に異なるという仮説が支持されたと考えられる。

肯定項目においては，中学，高校，大学生とも，多次元尺度法における結果では現実自己像と理想自己像・親友像とを区別する軸に高い重みづけ得点を持ち，相関関係においては，現実自己像－理想自己像間および理想自己像－親友像間の相関が高かった。岡田（1987）においては，中学生期に親友像と理想自己像の相関が高く，高校から大学生期にかけては，現実自己像と理想自己像の相関が高かったが，この結果とは異なっていた。さらに，岡田（1995）においては，肯定的項目において，現実自己像・理想自己像・親友像間での相関が見られなかったが，これとも異なった結果が得られた。これは，次のように考えることができる。Damon &Hart（1982）が述べるように，児童期から青年期にかけての発達の諸段階において顕在化する自己の側面はそれぞれ異なっている。しかし，肯定項目は，そうした側面に分かれた形ではない一般的な形容詞による質問項目であるため，そうした側面による発達的な相違が反映されず，一貫した結果が得られない可能性があり得る。この点については，今後のデータの蓄積による検討が必要と考えられる。

否定項目では，現実自己像と親友像の相関関係が中学・高校で見られた。これは，岡田（1995）における結果とも一致するものである。また多次元尺度法においては，各年代とも想像と現実を区別する軸への重みづけ得点が高かった。これらの結果は，親友を選択する際に自分がなりたくないと思うような姿をもった他者を親友として選択することは考えにくいこと，また自分にとって「なりたくない姿」は，個人が日常的に意識にのぼらせにくい次元と考えられ，他者との比較次元として用いられにくいとことなどによるものと考えられる。

4　現実自己像・理想自己像・親友像間の相関関係と友人関係

友人関係尺度に下位尺度得点と自己像・親友像間のDスコアには明確な相関関係は見られなかった。このことから，「心理的距離を持った友人関係を取る青年は，親密で内面的な友人関係に比べ，自己像と親友像との類似性が各自己像の側面においても小さいだろう」という仮説は検証されなかった。

各学校段階での友人関係尺度得点の上・中・下位群についての多次元尺度法の結果からは，次のように考えられる。すなわち，心理的側面では，高校，大学の「侵入回避」下位群で，親友像と理想自己像を共通の枠組みとしてとらえており，当初の仮説が支持される結果となった。一方，「軽躁的関係」においては，中学の上位群が心理的側面で親友像と

理想自己像を共通の枠組みとしてとらえており，仮説とは逆の結果となった。これは，「軽躁的関係」によって示される関わり方がむしろ適応的であり，理想自己像のモデルとしてむしろ上位群が親友像を取り入れる傾向がある可能性を示唆している。

社会的側面においては，高校での「軽躁的関係」下位群が，親友像と理想自己像を共通の枠組みとしてとらえており，当初の仮説が支持される結果となった。しかし，一方で，「軽躁的関係」の上位群のような円滑な友人関係を取る青年が，対人関係に関する自己像に関して，友人とは異なる枠組みで自己をとらえているともいえる。このことは，青年自身は友人との間での「内面的関係」を求めているが，友人はそうした関係をとってはいないと認知した結果，青年自身も表面的関係をとっている，とする岡田（1999）結果とも符合するものである。

5　まとめ

（1）現代青年に特有の友人関係と適応の関連については，軽躁的関係を取る青年は全般的に適応感が高く健康的であるものの，高校年代の心理的，身体的側面については，軽躁的関係を取る青年は現実自己と理想自己の距離が高く，自己不一致的な状態であることが示唆された。

（2）自己像と親友像の関係については，中学での心理的側面，高校・大学での社会的側面において，親友像と理想自己像が共通の枠組みとしてとらえられていることが見出され，発達的に顕在化しやすい自己の側面の変化と対応することが示唆された。

（3）自己像，親友像と現代青年に特有な友人関係の関連については，高校の社会的側面（「軽躁的関係」の下位群）および高校・大学の心理的側面（「侵入回避」の下位群）がそれぞれ上位群よりも，親友像を理想自己像のモデルとしていることが示唆された。すなわち発達的に顕在化しやすい自己の側面において，現代的友人関係を取らない者の方が親友像と理想自己像を共通の枠組みとしてとらえる傾向が見られた。

引用文献

Blos, P. 1962 *On adolescence : a psychoanalytic interpretation*. New York : Free Press

Damon,W.,& Hart,D. 1982 The development of self－understanding from infancy through adolescence. *Child development*, 53, 841－864.

遠藤由美　1991　理想自己に関する最近の研究動向－自己概念と適応との関連で－　上越教育大学研究紀要，10，2，18－35.

遠藤由美　1995　精神的健康の指標としての自己をめぐる議論　立命館大学社会心理学研究，11，2，134－144.

エリクソン　E H. 小此木啓吾（訳）1973　自我同一性　誠信書房（Erikson,E H. 1959 *Identity and life cycle* : Selected papers. In Psychological Issues. Vol. 1. New York · International Universities Press.）

Hall,G.S. 1904 *Adolescence . Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime,*

religion and education Volume 2. New York : D.Appleton and Company.
Harter,S. 1983 Developmental perspectives on the self－system In Mussen, P.H. (edt.) *Handbook of Child Psychology* (4 th edition) IV New York · Wiley Pp. 275－385.
Higgins,E.T. 1987 Self－discrepancy. A theory relating self and affect. *Psychological review*, 94, 319－340.
仏谷行人 2000 倫理21 平凡社
西平直喜 1973 青年心理学 塚田毅（編） 現代心理学叢書7 共立出版
落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, 44, 55－65.
大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究：現代青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究, 32, 100－109.
大野久 1995 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見孝編 講座 生涯発達心理学4「自己への問い直し：青年期」 金子書房 Pp. 89－123.
岡田努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116－121.
岡田努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, 1, 11－18.
岡田努 1993a 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43－55.
岡田努 1993b 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162－170.
岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354－363.
岡田努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 442－449.
高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較：日本人大学生にみられる特徴 教育心理学研究, 41, 339－348.
ロジャーズ, C R. & ディモンド. K.F. 友田不二男編訳 1967 パースナリティの変化 ロジャース全集13 岩崎学術出版
(Rogers,C.R.& Dymond,K F. 1954 *Psychotherapy and Personality Change.* Chicago · University of Chicago Press)
Rosenberg,M. 1965 *Society and the adolescent self－image*. Princeton Princeton University Press
佐久間路子・遠藤利彦・無藤隆 2000 幼児期・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して 発達心理学研究, 11, 176－187.
柴山直 1994 多次元尺度法の基礎概念と適用例 Niigata educational psychologist, 11, 5－12.
山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64－68.

付記

本研究の一部は，平成9，10年度文部省科学研究費 奨励研究(A)（課題番号9710082）「現代青年における対人関係希薄化と人格障害傾向の関連について」による研究補助を受けて実施された。